

## 内村鑑三における「東北」の概念 ——地方の観点からの「日本」概念の分析——

渡部 和 隆

### 序：本論の目的

「日本の神学は、垂直線的な神学の視点と水平線的な社会科学の視点が、十字架のようクロスするところで、形成され発展すべきものである。逆にいうと、そのような神学がこれまで形成されてこなかったゆえに、わが国の神学は十分に日本を、神学の一対象として理解し考察し得ず、残念ながら、日本にたいして、日本がもっとも必要としていた批判、預言者的批判を、そしてまた日本がもっとも必要としていた平安、祭司的平安を与えることができなかったのではなかろうか。」<sup>1</sup>

この引用は、日本の神学者である古屋安雄が大木英夫との共著『日本の神学』において、大塚久雄の矢内原忠雄への弔辞を引用しながら書いたものである<sup>2</sup>。神学にとっての最大の問題は罪であり、神学が日本を対象とする際には日本および日本人の罪を考えなければならない。日本および日本人の罪こそ日本の神学の最大の問題なのである。そして、日本および日本人の罪が結果的に日本社会における不義不正や日本と諸外国との間における不義不正の具体的な問題として現れてくる以上、日本の神学は経験的に存在している日本社会の社会科学的分析を必要とするのである。古屋によって書かれた『日本の神学』の「第一部 歴史的考察」は、「キリスト教と関わり合った日本の歴史」<sup>3</sup>からキリスト教にとって日本の持つ意義を考察した貴重な論考である。日本のキリスト教を論じるには日本という概念の中身が問われなければならない、そのため経験的に存在している日本に対する歴史的・社会科学的な考察が必要なのである。日本のキリスト教学者である芦名定道も同様の問題意識から古屋の論考を「日本を正面から歴史的に論じた貴重な研究である」<sup>4</sup>と高く評価している。しかし、続いて芦名は、古屋の論考の貴重な価値を認めつつも、「『アジア』『日本』への反省は、必ずしも十分とは言えないように思われる。（中略）あたかも、『日本』が自明の事柄として語られてこなかっただろうか。」<sup>5</sup>と述べ、現在の研究状況を批判的に概観している。「これまでの『アジアのキリスト教』研究における問題点の一つは、この『アジア』の地平への考察が不十分であったということにほかならない——そもそも『アジア』『日本』と

いった対象への反省が欠如している——。」<sup>6</sup>というわけである。芦名は従来の土着化論を再考した後、これからのアジアのキリスト教の研究の条件として、「アジアの宗教文化の正当な理解とそれを可能にする宗教論」、「キリスト教的伝統が伝承してきた古代イスラエル史の規範性の理解を正当に取り扱うこと」、「キリスト教とアジアの宗教的伝統双方の自己理解の進展から相互変革までを含む動的プロセスを展望する」<sup>7</sup>ことの三つを挙げ、これら全ての条件を満たす研究のモデルとして「地平モデル」<sup>8</sup>を提示している。

古屋と芦名の議論から取り出されてくる問題は、日本のキリスト教にとっての「日本」概念の自明性の問題である。「日本」という概念は必ずしも単一の自明な概念ではなく、社会や歴史といった観点から自覚的・批判的に検討されなければならない概念なのだが、果たしてその作業が適切に行われてきたかという問題である。日本のキリスト教の思想史に引き付けて言えば、明治・大正・昭和を生きた日本人キリスト者の「日本」概念がどうなっているかを批判的に検証しなくてはならないということである。彼らにおいて、「日本」は単一の自明な概念とされているのか、それとも別なように表象されているのか、テキストに即して分析されなくてはならない。本論は、こうした日本の神学やアジアのキリスト教の研究状況の論点を念頭におきつつ、日本人キリスト者の中から内村鑑三を選び、彼の思想を「東北」や「地方」の観点から分析し、内村の「日本」概念がその内部に複合性の認識を抱えていることを明らかにするものである。すなわち内村において「日本」は、単一の自明な概念ではなく、むしろ複数の要素から構成される複合的な概念であり、したがって内村の思想のうちには複合的な「日本」のどの要素がキリスト教を伝道するのに適切かという選択の問題をめぐる思索が潜んでいることを、「東北」や「地方」の観点から分析することによって明らかにする。従来の研究では、内村の日本とキリスト教とをめぐる思想としては「武士道の上に接木されたる基督教」<sup>9</sup>が一般に有名であるが、本論では武士道とは異なる仕方で、経験的に存在している「日本」にアプローチしていた内村の姿を提示する。もちろん、本論で提示する内村の思想の側面に関しては、先行研究もまた存在する。三浦永光がその著書『現代に生きる内村鑑三 人間と自然の適正な関係を求めて』<sup>10</sup>において分析した「平民」をめぐる内村の思索がそれである。三浦は内村の「平民」の思想を、農本主義といった経済思想や社会思想の観点から分析し、内村の思想が現代においても持つエコロジカルな意義を明らかにしている。三浦によれば、内村の「平民」概念の特色は「自己の労働によって立つ独立自主の自覚をもった人間であること、その生活が自然に根ざしていること、平和を愛好すること」<sup>11</sup>の三点である。注目すべきことは、このような「平民」が現実の日本社会に多数存在するとは内村も考えていなかったことである。三浦は「内村のいう『平民』は、華・士族に対して平民身分を指す経験的概念として出発しながら、右に見たような三点の強調によって、しだいに理想的性格をおびてくると思われる。」<sup>12</sup>と分析している。内村の「平民」概念は、経験によって肉付けされる概念であると同時に、内村にとっての理想的な平民の姿を表す理念でもあるという両義的な存在であった。理念は時に理想として、現実の存在者に対して規

範的な性格を帯びる。内村の「平民」概念もまた同様であり、「キリスト教伝道をとおして、民衆を真の平民たらしめねばならぬ」<sup>13</sup>というのが内村の考えであった。そして、彼は「真の平民」になれる人間を、地方の読者との交流を通して実際に見出していた。三浦は内村の周囲にいた地方の平民を何人か挙げ<sup>14</sup>、「内村と農民たちは互いから学び合い、また互いを精神的に（ときには経済的にも）力づけ合ったのである。先に見た内村の『平民』の観念はこのような人々との具体的な相互交流の中で形成され、訂正され、鍛え上げられたものと見なければならないだろう」<sup>15</sup>と述べている。本論は、三浦が明らかにした内村の「平民」の思想を、日本とキリスト教という問題圏から新たに捉え直し、日本の神学に対するその意義を明らかにするものだと位置づけられる。管見の限り、内村の「平民」の思想を内村の「日本」概念との関係で分析した先行研究は見当たらなかった。以下、本論では、地方の「平民」との「具体的な相互交流の中で形成され、訂正され、鍛え上げられた」内村の思想がどのようなものであったか、「地方」や「東北」の観点から分析し、その意義を明らかにしていくこととする。

もちろん、内村は社会学者としての訓練を受けた人間ではないので、古屋の言う社会科学的な分析まで求めることはできない。複合性の認識とは言っても、だいぶ荒削りなものである。また、芦名の言う「『アジア』『日本』といった対象への反省」としても不十分なものであり、やはり日本というネーションが粹として背後に潜んでいることが読み取れる。内村は「二つのJ」の片方である Japan が崩壊するようなことは認めないのである。しかし、たとえ粗野な萌芽の段階だとしても、内村の「日本」概念に複合性が指摘できるならば、それは無教会キリスト教における日本的キリスト教の研究にとって大きな意義をもつ。すなわち内村の思想に潜んでいたところの単一の自明な「日本」概念に対する不協和音が無教会第二世代の日本的キリスト教にどのように受け継がれたのか、あるいは受け継がれなかったのかは今後は問われなくてはならなくなる。本論はそのような「日本的キリスト教」の研究のための最初の考察となるものである。

## 1. 「東北」と「西南」

本節ではまず内村の「東北」概念を分析し、その意味するところの内実を明らかにする。具体的にはまず『地理学考』における日本やその地方に関する内村の考察を分析し、次に現実の日本社会における諸地方間の政治的・社会的関係を内村がどのように認識していたかを彼の明治維新観の分析を通して考察する。その際、キーワードとなるのは「東北」と「西南」である。

### 1-1. 『地理学考』における「日本」

『地理学考』とは一八九四年という日清戦争の始まる直前に出版された内村の初期の著作であり、三年後に『地人論』と改名された。内村がまだ楽観的な進歩史観を信じていた時期

の著作である。内容は世界の地理や歴史の考察から日本の世界史的な使命を考えようというものであり、「地理学と歴史とは舞台と劇曲との関係なり、地は人類てふ役者が歴史てふ劇曲を演ずる舞台なり」<sup>16</sup>とあるように、各国や各民族が地理的に異なる自然環境に適応して独自の個性や文化を身につけ、さらに歴史の中で与えられた天職や役割を全うすることを通して文明の進歩が実現し、最終的に地球の文明が完全な形に向かうという楽観的なストーリーが描かれている。内村はこの理想論的なストーリーの中で日本が果たす天職や使命を考察している。内村によれば、日本の天職は東洋文明と西洋文明、すなわち「東西洋間の媒介者」<sup>17</sup>であり、「パミール高原の東西に於て正反対の方角に向ひ分離流出せし両文明は太平洋中に於て相会し、二者の配合に因りて胚胎せし新文明は我より出て再び東西両洋に普からんとす。」<sup>18</sup>と結論づけている。日本が世界の中で果たすべき使命や役割を考察しているという点で『地理学考』には政治的な色彩もあり、しばしば日本における地政学の先駆的著作とされるが、全体的に見ると、「真理を恋ひ慕ふ誠意を以てすれば、地理学は一種の愛歌なり、山水を以て画がゝれたる哲学なり、造主の手に成れる預言書なり」<sup>19</sup>とあるように、内村の人文地理学的考察と詩人的な構想力と創造神の摂理への信仰とが結びついて生まれたと評すべき作品である。いわば、人文地理とキリスト教の信仰とが想像力でもって自然神学的なコミュニケーションをすることで生み出された作品である<sup>20</sup>。本論との関係で重要なのは日本の描かれ方である。『地理学考』において日本はどのように描写されているのだろうか。

注目すべきは日本の山脈に関する内村の論である。まず、内村の用いる概念装置から説明しよう。内村はスイスといった具体例を挙げつつ、一般に山脈は国の独立や国民の自由を促す働きをなすと言う<sup>21</sup>。山脈はさらに東西に走るものと南北に走るものとに分類され、前者はアルプス山脈やピレネー山脈に代表されるように国の分離独立と国民の自由を促す傾向があるが、後者はアペニン山脈やスカンジナビア半島の山脈に代表されるようにその働きが弱いと言う。内村はこの山脈の法則の発見者として「ブーエー氏 (M. Bouet)」なる人物を挙げ<sup>22</sup>、東西に走る山脈の傾向を「ブーエー氏第一則」<sup>23</sup>、南北に走る山脈の傾向を「ブーエー氏第二則」<sup>24</sup>と呼んでいる。内村はこの二つの概念装置を使って日本の山脈を分析し、次のように結論づけている。

「本邦の地勢より論ずる時は南北するは幹にして東西するは枝なり、樺太支那の両山系は <sup>〔はしご〕</sup> 梯 <sup>クチキ</sup> の縦木にして伊勢、飛濃、富士等の東西脈は <sup>〔きざはし〕</sup> 階 なり、南北するは東西するよりも易し、然れども幾多の障害なくして南北する能はざるなり。

故に日本国の地勢は伊太利、スカンダナビヤの如く、ブーエー氏第二則に因るなれども、之れに加ふるに希臘瑞西の如く東西脈のあるありて又第一則に因るものなり、以て一統和合するを得べし、以て一統の下に分離自治を計るを得べし。」<sup>25</sup>

内村によれば、日本の山脈は南北に走るものがメインなので、「ブーエー氏第二則」に従い、国としての「一統和合」が実現できるが、東西に走るものも弱いながら存在しているので、「ブーエー氏第一則」に従い、「分離自治」をはかる必要も出てくるという。この一読しただけではわかりにくい分析結果から推定されるのは、前提として内村が日本を均一な単一民族の国だとは考えていないということである。内村はむしろ、独自の個性をもつ様々な地方の民が、その独自の個性はそのままに、何らかの形で連合して日本という統一国家が出てくると考えている。内村の「日本」は諸地方の連合体であり、「枝」である東西脈の「第一則」によって分離独立している諸地方が、「幹」である南北脈の「第二則」によって連合して統一されたものなのである。内村においては、ナショナリズムはリージョナリズムをうちに孕んでおり、リージョナリズムはナショナリズムの枠のなかで「日本」に結合しているのである。いわば、日本というネーションの形成を志向する地方という考え方であり、ネーションのためのリージョナリズムなのである。内村は、日本の地形をギリシアの地形と比較しながら、次のように言う。

「希臘の山脈に又南北するものと東西するものとの二様あり、前者は大陸山系にしてアルプス山の一支が南向して爰に至りしものなり、<sup>〔あたか〕</sup> 恰も我の支那脈が喜馬拉亜脈<sup>〔ヒマラヤ〕</sup>の余派として東北するが如し、又本脈を横断するに副脈あり、全国を分ちて数箇の地方となす、恰も我の東西脈が各地方封建自治を促すが如し、日本は亜細亜の希臘なり、共に大陸の東陲に起て東門の関を守るが如し。」<sup>26</sup>

『地理学考』で扱われているギリシアは古典古代時代のギリシアである。すなわち政治体制としては多様なポリスに分かれていたが、統一された民族意識は共有されていた時代のギリシアである<sup>27</sup>。内村はそれが日本の「各地方封建自治」（おそらく江戸時代の幕藩体制のことか）と類似していると考えている<sup>28</sup>。古代ギリシアのポリス世界のように日本もまた、独立した各地方が集まって統一されることによって形成されている。これを受けて内村は「日本は亜細亜の希臘なり」とまで断言しているのである。

具体的にどんな地方の区分が内村の念頭にあったのかはこれだけでは不明瞭だが、『地理学考』の他の箇所から伺うことができる。そこで登場するのが「東北」と「西南」である。

「東欧バルカン半島の結合するの難き、支那帝国の南北殆んどの異国民たるの感あらしむるの理由、我<sup>〔かんれい〕</sup> 函嶺（引用者注：箱根山の異称）が我邦東北、西南の両半部をして大差あらしむるの事実は皆ブーエー氏第一則の実例なり。」<sup>29</sup>

内村は箱根山や富士山といった東西に走る山々の連なりをもって、日本は「東北」と「西南」とに大きく二分されると考えている。内村は日本国内に境界線が存在していることを認識し

ているのである。さらに細かい区分に関しては、内村は日本の国土の構造をヨーロッパ大陸の構造にもなぞらえて、次のように言う。

「我本洲の西南隅日本海と内海との間に伸る長半島は冷血なる長州人の住居する我の西班牙<sup>〔スペイン〕</sup>なり、東隣の畿内は久しく我国文明の中真たりし我の仏蘭西<sup>〔フランス〕</sup>なり、紀伊半島は我の伊太利<sup>〔イタリア〕</sup>として南海に突出し、尾濃の沃原（引用者注：おそらく濃尾平野のこと）の其東北に附着するは恰かもポー沿岸の郊原がアペニン山の東北に横たはるが如し、半島の北境、琵琶淡水が八景を呈する辺はレマン湖を有する瑞西<sup>〔スイス〕</sup>ならん、アルプス山の重嶺巨峰<sup>〔えんえん〕</sup>蜿蜒として東に互るに比して濃飛信（引用者注：おそらく、美濃国、飛騨国、信濃国のこと）の重巒<sup>〔ちようらん〕</sup>鬱然として国の中部に蟠<sup>〔わだ〕</sup>かまるあり（引用者注：おそらく日本アルプスのこと）、其南支して遠駿豆（引用者注：おそらく遠江国、駿河国、伊豆国のこと）となりて海に終る所<sup>〔これ〕</sup>是我のバルカン半島なり、関東の野、利根の水域は洪葛利<sup>〔ハンガリー〕</sup>の沃野ダニユーブ（引用者注：ドナウ川の英語名）の水域とせん、北海の能登を我の丁抹となし、之より平沙百里東北に向つて弓形をなして海に臨む我の北越は実に独逸聯邦の位置にあり、是より東北<sup>〔こうぼう〕</sup>広袤<sup>〔こうぼう〕</sup>の地、文化を蒙るに最も遅かりし我の奥羽北海の地はムスコビヤ（引用者注：モスクワの江戸時代の呼び方）の全土たる魯士亜<sup>〔ロシア〕</sup>の位置に立つにあらずや、休言<sup>〔いうをやめ〕</sup>よ、余輩の比較は想像力の濫用より来ると、余輩我国を亜米利加<sup>〔アメリカ〕</sup>に比せんとするも能はざるなり、亜非利加<sup>〔アフリカ〕</sup>なり、濠斯利亜<sup>〔オーストラリア〕</sup>なり、印度<sup>〔インド〕</sup>なり、支那<sup>〔シナ〕</sup>なり、余輩は比較を求めんと欲して能はざるなり、日本国の位置は亜細亜的なれども其構造は欧羅巴的なり。」<sup>30</sup>

興味深いことに、内村は日本の地形構造をヨーロッパのものになぞらえて理解している。日本は地理的にはアジアに位置しているが、その地形構造はヨーロッパに類似している。だから日本はアジアに属しながらも西洋文明を吸収し、東洋文明と西洋文明との媒介者となることができるのである。本論の観点からみれば、ヨーロッパが複数の国が集まって形成されるように、日本も複数の地方が集まって形成されると内村が考えていたことが読み取れるのである。

以上より、内村の「日本」概念は、均一な単一民族の国ではなく、むしろ多様な個性をもつ地方がその独自の個性はそのままに統一された連合体であり、一のうちに多を含む概念だったと結論づけられる。内村の「日本」概念は複合的な概念だったのであり、ナショナリズムの枠内でのリージョナリズムだったのである<sup>31</sup>。

## 1－2．内村の明治維新観

前節では内村の「日本」概念が、均一な単一民族の国家ではなく、むしろ独自の個性を持つ地方が連合して統一されたものであり、その統一の内に多を孕んでいることを明らかにし

た。「日本」が諸地方の連合体だとすると、当然その連合の現実の仕方が問題となる。現実の連合においては地方間の政治的社会的な力関係が反映されるはずであり、格差や不平等が生じるからである。果たして内村は明治の日本のなかにそのような格差や不平等が存在すると認識していたのだろうか。認識していたとすれば、その内実をどのように把握していたのだろうか。本節ではこの問題について、内村の明治維新観の検討を通して考察することとする。

「東北」と「西南」という観点から内村の明治維新観を分析するに際して、重要となるのが「胆汁数滴」というテキストである。これは一八九七年四月に六回に分けて万朝報の社説欄に掲載されたものであり、通し番号と小見出しがついた合計三〇の短文から構成されるテキストである。一八九七年といえば、内村が日清戦争における義戦論の失敗を経験した後、本格的なジャーナリストとして活動を開始し、足尾銅山事件などに対しても言及し始めた時期である。内村が近代化する日本社会の様々なひずみや問題点に目を向け始めた時期だと言えよう<sup>32</sup>。「胆汁数滴」の主な内容は、「社界の病源は薩長政府其者にあり、革新此に及ばずんば枝葉の改革は徒勞たるのみ。」<sup>33</sup>とあるように、明治の藩閥政府とそれを牛耳る九州人（主に長州人、薩摩人、肥後人）に対する非常に辛辣な批判である<sup>34</sup>。まず、内村の明治維新観が読み取れるテキストをいくつか引用しよう。

「薩長政府は如何なる精神と法方とを以て徳川政府を乗取りし乎、是れ今日大いに攻究すべき問題なり、勤王は誠に彼等の精神なりし乎、公議正論は実に彼等の法方なりし乎、彼等の乗取り手段に未だ歴史の認めざる隠謀譎計なかりし乎。」<sup>35</sup>

「勤王を名とし、錦旗を翻へし、終に日本国の実権を握るに至りし彼等今日の行為は如何、維新改革なる者の道義的改革に非ずして利己的掠奪の一種たりしことは其今日に顕れたる結果に依て明瞭なるに非ずや」<sup>36</sup>

「余輩は思ふ新日本は薩長政府の賜物なりといふは虚偽の最も大なる者なりと、開国、新文明、封土奉還は一として薩長人士の創意に非ず、否な、彼等は攘夷鎖港を主張せし者なり、而して自己の便宜と利益とのために主義を変へし者なり、即ち彼等は始めよりの変節者なり、新文明の輸入者とは彼等が国賊の名を負はせて斬首せしおぐりかうづけのすけ小栗上野介等の類を言ふなり、真正の開国者とは渡辺華山、高野長英等の族を言ふなり、封土奉還説すら木戸大久保等の創意に出しに非ずして姫路の城主さかゐうたのかみ酒井雅楽頭の建白に基けりと伊藤博文侯は報ぜり、薩長人士は世界の大勢と日本国民の意向とに乗ぜしのみ、新日本は文明世界と日本国民との作なり、開港和親は皆旧幕政府の創意なり 此点に関して我等日本人は薩長政府に一の恩義なし」<sup>37</sup>

「此腐敗政府に導かれて、此腐敗華族を国民の亀鑑と仰て、此代価付きの道德に薫育せられて、日本国民の結極は如何、日本は国民としては救ふべからざるの位置に立至らんとしつゝありとは真に日本を愛する人が屢々発せし愁声なり（中略）若し薩長政府を永

続せん乎、是れ日本の最終政府たらむやも未だ以て量るべからず、胆汁未だ吐き尽さざるに余輩の眼中に血涙の浮び来るを覚ゆ」<sup>38</sup>

内村は、明治維新は薩摩藩と長州藩による「乗取り」「利己的掠奪の一種」だとしている。実に興味深いことに、明治維新によって日本の近代化が始まったという現代の一般的な歴史観とは真逆の歴史観を提示している。内村にとって、明治の藩閥政府は日本国民と文明世界がなしつつあった近代化の波にうまく乗っただけの利己的で偽善的な「変節者」であり、徳川幕府を乗っ取った略奪者であって、日本の近代化を導いたリーダー的存在では全くない。むしろ日本を墮落と腐敗と悪徳とに導いた負の存在であり、日本を破滅に導くかもしれない存在なので、内村は「血涙の浮び来る」のを感じざるを得ないとまで書いている。このような明治維新観が歴史学的にみて適切かどうかは論者の力量を超えるため、ここでは扱わない。本論ではこのような明治維新観をもとにして内村がどのような議論を展開しているかを見ていくこととする。その上で、本論の問題意識からみて興味深いのは、内村が「第二の維新」なるものに言及し、その担い手として佐幕派の多かった「東北」に注目していることである。

「彼等は暴を以て我等を圧せり、我等は暴を以て彼等に報わじ、彼等は陰計詐術を用ひたり、我等は公明正大なるべし、勤王は彼等掠奪の名義なりき、我等に唯公義の頼るべきあるのみ、法と術と威と権とを以てせし彼等は今日の墮落を来せり、我等は善を積んで汚毒を後世に遺さざらん事を勉むべし、第二の維新は君子的たるべくして薩長的たるべからず。」<sup>39</sup>

「西南の士は怜智に長けて不実なり、東北の士は愚鈍なれども実直なり、日本国の政權西南人士の掌中に落ちて国に「愛国論」あり「尊王主義」あり、彼等は能く事物を利用するの術を知る、然れども彼等の支配の下ありて民権の挙がりし実例なし、日本国の民権主張者は東北に多くして西南に尠し、僧日蓮、佐倉宗五郎等屈指の民権家は多くは是れ函嶺以東の人なり、愚直或は暴とし終る事あらん、然れども正義と忠勤との仮面を被りて投機商の親玉となるが如きは東北人士の逆も学ぶこと能はざる所なるべし、民権の振興、実直の恢復は東北人士の手を借らざるべからず。」<sup>40</sup>

内村は国家のメインストリームとなった「西南人士」の「怜智」「不実」および彼らによる明治維新を批判し、「公義」と「善」に基づいた「君子的」な「第二の維新」なるものに言及する。そして、薩長政府が流した腐敗や害毒に対する「民権の振興」「実直の恢復」を東北の人々が主体となって実現することを期待しているのである。ここで唐突に「第二の維新」「民権」という言葉が出てくるのに注目したい<sup>41</sup>。これは当時の歴史的文脈をみることでその意味を推定することができる。近代の東北史を簡単に説明しておこう。

歴史学者の河西英通は、田中秀和の研究を引きつつ、戊辰戦争によって軍事的勝利者である西南の官軍が開化を意味するようになり、それに対して東北はアイヌ民族の蝦夷地と同じような、天皇を知らない未開地として設定されるようになったと述べている。「西南諸藩が列藩同盟に敵対したという政治的選択・判断の正当性が、軍事的勝利によってではなく、近世以来の東北＝異境・異域に対するいわば文明論的勝利によって支えられた」<sup>42</sup>というわけである。戊辰戦争によって後進の未開地だという自己意識を植え付けられた東北であるが、そうした後進意識は単なる疎外意識に終わらず、政府批判や自由民権運動への志向を見せるようになった。河西は一八七四年から一八八二年にかけての東北人の言説を例示し、いずれも「社会的周縁性を逆手にとり、文明開化と民衆統治の合理化という大義名分をかかげて政府批判・自由民権論を主張」<sup>43</sup>したり、「旧藩主に対して、異境・異域からの不可欠な脱却路として自由民権運動が差し出された」<sup>44</sup>りしていると述べている。これを河西は「強烈な地域帰属意識は文明コンプレックスに直面して、天皇制を支配原理とするマジョリティ社会＝『日本』への参入と、同権平等を幻想させる社会階層＝『国民』への同化を目指しました。その意味において東北の自由民権運動は〈下からの日本化運動〉〈下からの国民国家形成運動〉であり、〈周縁からのナショナリズム〉〈下からのナショナリズム〉であったということが出来るのです。」<sup>45</sup>と説明している。さらに青森県の地方紙の東奥日報の一八八九年の社説の分析から以下のように述べている。

「当時、第二維新論それ自体は広く見られましたが、『東奥日報』の場合、憲法発布・国会開設などの立憲体制を西南人士にとって代わり、われわれ東北人士が主体的に担おうではないかと訴え、第二維新の推進主体として強烈に自己を意識し、第二維新の必然性のなかに自己の歴史的使命を自覚した点に特徴がありました。東北意識で裏打ちしながら、臣民意識を鼓舞したということもできますし、東北意識は臣民意識を鼓舞することぬきには展開しえなかったともいえます。両者は相対立するものではなかったのです。」<sup>46</sup>

河西が分析した自由民権運動志向の東北人士のテキストは全て帝国議会開設以前のテキストであり、内村の『胆汁数滴』は帝国議会開設から七年も後のテキストであるが、不思議なことに、薩長政府と西南人士への批判、東北人士による第二の維新と民権の振興、そしてナショナリズムの枠内でのネーション志向のリージョナリズムという構造など、いくつかの共通点を指摘することができる。比べてみると、『胆汁数滴』の内村はあたかも明治の近代化の中で未開の後進地というコンプレックスを植え付けられた東北人の眼を通して日本の社会や政治をみているかのようである。内村は、日本という諸地方の現実の連合体の中で、主流となった薩長の人たちよりも、後進の未開地と位置付けられてしまった東北の人たちの方に近い視点に立っており、明治の藩閥政府の中枢を担った九州の人たちを厳しく批判しつつ、東

北の人たちが日本というネーションにコミットすることで「第二の維新」すなわち「公義」と「善」による「民権の振興」「実直の恢復」が実現して日本国がよくなることを期待しているのである。

内村がこうした東北的な発想をどこから得たのかを文献レベルで確定させることは今回はできなかったが<sup>47</sup>、この時期の内村が同じような思想を継続して持っていたことは文献レベルで確認できる。例えば、一八九八年、東京独立雑誌において、当時の藩閥政府の政治家が立憲政治や議会政治の担い手としては不適格であり、彼らのせいで日本が腐敗と悲嘆に陥っているとした上で、「然れども、兄弟は兄弟にして姉妹は姉妹なり。西海の狐狸に欺かれて、我等は兄弟相疑ひ相分離するに至りしと雖も、一たび狐狸の狐狸たるを悟らば、我等は再び相親むべきなり。富と権とは彼等にあり、我等に愛と平和とあらしめよ。腐蝕は西南より始まり、更生は東北より来らざる可からず。」<sup>48</sup>と述べている。また一八九九年には、仙台において、第二高等学校のキリスト教青年団体の忠愛之友倶楽部の招待で講演をした際には、「我国の完全なる発達に強固なる意志の注入を要するを説き、而して歴史よりするも地理よりするも、東北人士は意志注入の大任に当らざるべからざるを論じ、薩長人の国家主義なる者は菰大蒜等南方葱性の植物を多食せし人種の情的政略なるを述べ、個人なる者の尊くして貴き所以を述べ、終に臨んで東北人士中西南人の尻に附従し、其奴僕となりて東北日本両つながらを辱かしむる者なるを憤り、手と足とに力を入れ、声を張り上げ拳を握りながら壇を下れり。」<sup>49</sup>と自ら記している。両方とも、「国の権力と富とを握って腐敗している西南人」対「それを道義的に匡正する使命をもっている東北人」という対立図式をとっている。この時期の内村は、日本という諸地方の連合体のうち、後進の未開地と位置付けられてしまった東北人の眼を通して日本の社会や政治を見ており、権力の中樞を担った西南人を腐敗の原因として厳しく批判すると同時に、その匡正を東北人が日本というネーションにコミットすることのうちに求めていたのである。

### 1-3. 「東北」の範囲の問題

第一節の終わりに補足として、内村の「東北」概念が現代のものとはずれていることに触れておこう。というのも、内村の「東北」概念は、現在の東北六県を指示するよりも、かなり広い意味で使用されているからである。これは今まで引用してきた内村の言葉からも確認できる。例えば、『地理学考』で内村は「我 函 嶺（引用者注：箱根山の異称）が我邦東北、西南の両半部をして大差あらしむるの事実は皆ブーエー氏第一則の実例なり。」<sup>50</sup>と述べていた。この区分に従えば、内村の「東北」概念は現在の東北六県に加えて、関東地方や北海道もそのうちに含むこととなる。内村の「東北」が指す範囲は、現在のものよりも広がったのである。河西は、「明治二〇年代（一八八七―一九〇六）にはいまだ現東北六県に対する一般的な呼称は『奥羽』でしたが、明治三〇年代（一八九七―一九〇六）に入ると全国的に現東北六県が『東北』と呼ばれるようになります」<sup>51</sup>が、明治時代の新聞や雑誌のタイトルの分

析から「用例は峻別されておらず、時代的特性が明瞭であるとは言い切れません」<sup>52</sup>と述べている<sup>53</sup>。これまで扱ってきた内村のテキストが一八九四年から一八九九年のものであったことを考慮すると、内村の「東北」概念は、「東北」という言葉自体が現在の意味へと収束していく過渡期にあったため、現在の「東北」とは範囲がずれていたり、現在の用法からは逸脱するような用例が見られたりするだろうと容易に推定できる。本節ではこの問題について触れることとする。

まずは「東北」の範囲の問題である。ここで扱うのは一九〇一年の「入信日記」というテキストである。これは内村が信州地方に講演旅行に行った際の日記であり、薩長政府のもたらした開化への嫌悪と信州地方の天然や人の賛美とが至る所に顔を出しているテキストである。いくつか例示しよう。

「信州に今日尚ほ多少の気骨の存するのは全たく碓氷峠の比蔭であると思ふ、世に薩長人の建てた明治政府ほど腐敗力の強い者はない、之を防ぐに唯天然の山があるのみである、然るに今や碓氷は貫通せられて、信州の地にも伊藤侯の政友会もあれば大隈伯の進歩党もある、実に堪らない事である、然し致し方がない。」<sup>54</sup>

「（引用者注：内村は姨捨山からの景色を眺めている）景色は東北無双と云ふても宜からう、若し対岸の鏡台山に一輪高く懸るならばそれこそ天使が舞ふて来るであらう、嗚呼日本も悪い国ではない、斯んな好い景色がある、時には好い人物もある、悪い者は明治政府である、政友会である、進歩党である、其他総ての政党、政治家である、教育家である、哲学者である、是さへなければ日本国は姥捨山の秋月である、是に優るの国は世界にあるまい、嗚呼、愛すべき日本、憎むべき政治家と其附属物。」<sup>55</sup>

「勿論信州にも悪人は沢山居る、それは伊藤侯の政友会や大隈伯の進歩党が此地に於て非常の勢力を占めて居るのでも能く分る、松本の町は人口三万に過ぎないが其中に妾宅が三百軒もあるさうだ、長野の市は善光寺の<sup>おかげ</sup>比蔭で風儀は甚だ悪いさうだ、上田人は祭礼的の喧噪が好きで深く考へる事は嫌ひださうだ、其他余の眼を以てしても信州人の悪い所は沢山見える。

\* \* \* \*

然し喜ばしい事にはまだ善光寺にも政友会にも感化されない信州人が残つて居る、即ち曾て「人国論」の著者が評せし「愚にして頑なる」信州人は残つて居る、彼等に眼光人を欺くに足る中国人士（引用者注：内村においてこれは中国地方の人々を指す）の愛嬌はないが、彼等の顔貌に嘘偽を吐かんと欲するも能はざる所の馬鹿正直な所がある、是れが信州人の最も貴い所であつて、若し是を失ふて長州人の伊藤侯や佐賀人の大隈伯などを真似るに至らば信州人はその存在の理由を失ふて有つても無きと同然のものとなるのであらう。」<sup>56</sup>

これらの引用からは、九州人と明治の藩閥政府に対する辛辣なまでの嫌悪感と両者がもたらした文明開化の悪影響に対する批判とが読み取れる。三番目の引用は内村がどういう性格の人間に価値を見出していたかを垣間見ることができる興味深いテキストであるが、さしあたり本論との関連で重要なのは、二番目の引用において内村が長野県の姨捨山からの景色を「東北無双」と呼んでいることである。内村は一九〇一年の時点では長野も「東北」に入っていた。内村の「東北」概念が指す範囲は現在の東北よりも広がったのである。さらに内村は次のようにも言う。

「北信は東京に近く、越後に接して居る故、其風俗人情は自づと関東的で亦東北的である、然るに南信は日本国の大淫婦なる名古屋の市に続いて居る故、彼女の魔力を感じざるを得ないと見える」<sup>57</sup>

この引用からは内村が越後すなわち新潟も「東北」に入れて考えていることが分かる。やはり、内村の「東北」概念は現在の東北よりもかなり広い範囲を指していたのである。長野や新潟を「東北」とするのは現代の眼からすると奇異にうつるであろう。しかし、河西によれば、例えば、一八八八年一〇月に開かれた東北十五州委員会（自由党系）において、「東北十五州」が陸奥、陸中、陸前、岩代、磐城、羽後、羽前、佐渡、越後、越中、能登、加賀、越前、若狭、信濃（現在の都道府県で言えば、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島、新潟、富山、石川、福井、長野）であったという<sup>58</sup>。当時はまだ過渡期であり、新潟や長野のような東北の近隣の県は東北と微妙な関係にあったため、時には東北に数え入れられることもあったのである。したがって内村の「東北」概念の範囲の広さは、当時の文脈からみれば、別におかしいものではなかったといえよう<sup>59</sup>。

さらに内村は上述の引用において、信州北部は新潟に接しているがゆえに、その「風俗人情」が「東北的」であると言う。ここからさらに読み取れることは、内村の「東北」概念は、単なる地理上の区分ではなく、ある特定の文化や人間の型を表す言葉だということである。内村の頭の中に「東北的」という文化や人間の型のイメージが存在していた。だからこそ、内村は「東北」の新潟の影響を受けて信州北部の文化や人間が「東北的」だと言うことができたのである。「東北的」という文化や人間の型のイメージの内実は、このテキストでは明記されていないが、それは先述した引用に記されていたところの、内村が好ましいと思う人間の型であろう。すなわち地方の土地に根差して暮らしている「愚にして頑なる」「馬鹿正直」な人間こそ内村が好ましいと感じる人間の型である。内村はそうした人間に東北や信州の読者を通して出会っていた。例えば、内村はこのテキストにて「麻績を経て西条の停車場に達すれば茲に二人の兄弟の歓迎を受けた、二氏共に純潔の信州人、有明山が人間となりて現はれし者、I君は郷先生にしてM君は百姓である、余輩は両君に接して始めて真正の信州に入つたやうな心地がした。」<sup>60</sup>と述べている。ここで登場する「I君」とは、内村の無教

会キリスト教を教育理念とした研成義塾という地元の私塾の教師、井口喜源治（一八七〇～一九三八年）のことである<sup>61</sup>。まさに「平民」的な読者である。内村の「信州人」概念は、井口のような土地に根差して生活していた「平民」的な読者との交流を通して、単純素朴な帰納法でもって肉付けされていったものと考えられる<sup>62</sup>。それとは正反対の人間の型が、開化の影響を受けた人間であり、明治政府の人間であり、薩摩と長州の人間なのである。

次は「東北」と北海道の関係に関する内村の考えである。これまでの引用からも、内村が「東北」と北海道とを同列において考えていたことが伺える。例えば、『地理学考』における「是より東北〔こうぼう〕広袤の地、文化を蒙るに最も遅かりし我の奥羽北海の地」<sup>63</sup>という記述である。この箇所において、内村は東北と北海道を区別せず、一緒くたにして扱っている。内村は晩年までこのような認識をずっと保持していた。例えば、一九二五年六月二四日の内村の日記である。

「六月二十四日(水) 曇 午後一時の汽車で、北海道函館時任家の慶事に携はるべく出発した。久振りの東北旅行である。我が邸内を旅行するやうに感ずる。其点に於ては関西と異なる。人間の悪い事に於ては東北関西何の異なる所はないが、天然の稍や雄大なる事に於て、東北は遥に関西に優さる。自分は東北の産である、殊に北海道育ちである。故に東北に往く事は易くして関西に行くことは難くある。」<sup>64</sup>

内村が「東北」に対する強い共感を抱いており、さらに東北の人間という自己認識をもっていたことが伺える記述である。日記ゆえに短い文章であるが、北海道に行くことを「東北旅行」と呼んでいたり、「自分は東北の産である、殊に北海道育ちである」<sup>65</sup>と書いていたりするところから、内村が「東北」と北海道とを同じカテゴリーに入れて扱っていたのが改めて読み取れる。この認識を晩年まで保持していたために、本論のテーマから見ても興味深いある騒動が後に起こるのだが、それは第三節で論じることとする。

## 2. 「東北」の救済

前節では一八九九年までのテキストを用いて、内村の「日本」概念が均一な単一民族の国家ではなく独自の個性をもつ諸地方が統一されてできる連合体であったことと、内村が政府の主流として権力の中枢を担った西南人の立場ではなく後進の未開地という意識を植え付けられた東北人の立場の方に立って日本の社会や政治を見ていたことを明らかにした。その後、歴史が進む中で、国家や国民の目が北海道や海外の植民地へ注がれるようになり、東北はその後塵を拝するようになった。一九一〇年代には東北全域が経済的にも後進地域として定着していく。河西は「一九一〇年代の東北は地域格差を内包しつつも、産業資本確立・帝国主義転化期の日本にあって、一方では米を中心とする第一次産品と資本主義的労働市場および北海道拓殖への労働力供給地として、他方では外米や肥料・軽工業品の移入地として、『国

内植民地』的役割を果しはじめたのです。」<sup>66</sup>という。東北が「国内植民地」となっていくのに前後して、国内での東北の地位低下を憂えて様々な東北論が登場することとなった。内村はこうした動きに対してどのような態度を取り、いかなる思索を紡いだのであろうか。本節ではこの問題を扱うこととする。具体的には、テキストが発表された時系列順に、まず東北に飢饉に関するテキスト、次に様々な東北論の登場に関係するテキスト、三番目に東北の救済に関するテキストを扱うこととする。

## 2-1. 「飢饉の福音」

まず扱うのは一九〇三年の「飢饉の福音」というテキストである。これは同年五月一日に東京基督教青年会館で開かれた東北地方凶歉救済演説会<sup>きょうけん</sup>にて内村がなした講演がもとになっており、この年に東北地方を襲った飢饉について語ったものである。このテキストは、「我々基督信者の信ずる所に由りますれば宇宙の根底は神の意志でありまして、宇宙の現象は一つとして神の命に依らずして起るものではありません、故に我々は飢饉の災害に遭遇して単に之を天然自然の現象としてのみ解することなく、其中に含まるゝ深き道德上の意味を解釈し、神の声に聴き其正当の懲罰を受け、以て我々の愆の赦されんことを祈るべきであります。」<sup>67</sup>と、一見天譴論を思わせる記述から始まるが、全体的にみると、日本社会や政府の責任を追及することに強調点が置かれており、それを聖書の語句やキリスト教的語彙でもって表現したものとなっている<sup>68</sup>。

内村がこの年の飢饉から解釈した「道德上の意味」は、「一、飢饉に依て我等は我等の平常の用意の足りないのを覚るのであります」<sup>69</sup>「二、飢饉に由て我等は政治家の無能怠慢と社会組織の不完全を覚るのであります」<sup>70</sup>「三、飢饉は人に取つては災害であります、土地に取つては幸福であります」<sup>71</sup>「四、言ふまでもなく凡ての災害は人の冷却せし同情推察の情を起すものであります、爾うして茲に特に注意すべきことは災害なるものは多くは悪人其者の上に直に來らずして、真個の悪人以外の者の上に来ることであります」<sup>72</sup>の四つである。レビ記の土地に関する律法<sup>73</sup>を引きつつ土地を神によって創造された生き物のようなものとみなし、飢饉を土地に安息を与えるための神のわざとする三番目の「道德上の意味」はエコロジー思想の観点からみて興味深いものであるが、本論との関連で重要なのは二番目と四番目である。まず、二番目の「道德上の意味」において、内村は当時の日本の米や雑穀の生産量や食糧の輸出入量について具体的な数字を挙げ、食糧が国内には十分あるはずだと指摘し、次に「然るに日本国民は斯かる過分の食糧を何う使用して居ますか」<sup>74</sup>とあるように、政府や社会の責任を追及する。具体的には、政府や国民が国の富をどのように消費したかが重大な問題なのである。

「彼等は此貴重なる米穀を潰して毎年何百万石と云ふ害有て益なき酒を造つて居るではありません乎、又之を給して何の善事をも国家に貢献しない数万の艶惰貴族を養つて居

るではありませんか、又重き税を此民に課して何の判然したる目的なきに用もなき益もなき大いなる軍艦を幾艘も造つたではありません乎、若し全国民が禁酒を執行するとすればそれがために毎年何百万人と云ふ窮民を優に養つて行くことが出来るではありません乎、貴族の一家を支ゆるためには数千の農夫は汗を滴して年中働らいて居らなければなりません、一人の兵卒を養ふためには六人の壮丁が地を耕さなければならないとの事であり、斯かる不平均極まる政治が行はれて居て国に餓死する者の出づるのは決して怪むに足らないではありません乎。」<sup>75</sup>

酒の製造、貴族や軍人の生活の維持、軍備の拡張といった事業に国の富が濫費されたことに飢饉の原因があると内村は指摘する<sup>76</sup>。もし国の政治が普段からちゃんとしていて国富が濫費されることがなければ、たとえ東北が凶作に襲われたとしても、問題なくこれを救うことができたはずである。しかし、こうした諸事業に濫費されたがために、東北が凶作に襲われると飢饉が発生してしまったのである。したがって飢饉は純粋な天災ではなく、むしろ明治政府の「不平均極まる政治」が原因で起こった人災としての側面があり、明治の藩閥政府の政治家や日本社会の責任や罪なのである。内村自身は「道德上の意味」という言葉を使っているが、客観的にみてここで展開されているのは内村なりの社会分析である。内村はプロの社会学者ではないので粗削りなものではあるが、彼なりに飢饉の社会的な原因を分析し、その責任は明治政府の政策にあるとして批判している。学問的な分析というよりはむしろジャーナリスティックな社会分析である。興味深いのは、ジャーナリスティックな社会分析と聖書の思想との結合である。内村はアモス書六章三節以降の聖句「汝等は災禍わざはひの日をもて尚遠しと爲し強暴の座を近づけ 自ら象牙の牀とこに臥し寢臺ねだいの上に身を伸し群の中より羔羊を取り圈をりの中より犢牛こうしを取て食ひ 琴の音にあはせて唄ひ噪ぎダビデのごとくに樂器つくを製り出し大罍おほさかづきをもて酒を飲み最も貴とき膏あぶらを身に抹りヨセフの艱難なやみを憂へざるなり」（文語訳）<sup>77</sup>を引用し、「斯かる政治家が国を治め斯かる社会が成立つて居る間は饑饉は国民の上に臨むべき神よりの適當の刑罰であります」<sup>78</sup>とあるように、キリスト教的な語彙を使って、明治の藩閥政府の「不平均極まる政治」を批判するのである<sup>79</sup>。二番目の「道德上の意味」においては、まさに聖書中に書かれた思想と近代日本のジャーナリスティックな社会分析とが交差し、日本の罪を問題にしているのである。

続いて四番目の「道德上の意味」を扱う。ここで内村が扱うのは以下の引用で述べられた問題である。

「今年の我邦の饑饉の如き若し其民の罪惡の度合から申しましたならば、之れは西南の薩摩が長州に来るべき筈のものであります、日本人を今日の偽善と墮落に導いた者は重に薩州人と長州人とであります、又彼等の罪惡を助けた者は肥後の教育家と文人とであります、故に若し罪惡応報が饑饉の目的でありますならば之れは重に西南地方を襲ふべ

き筈のものであるやうに見えます、然るに実際は全く之に反して比較的罪少き東北人の上に臨み来つたのは如何にも惨酷であるやうに見えます。」<sup>80</sup>

内村は前節で明らかにしたところの、諸地方の連合体という「日本」概念と「西南」対「東北」という対立図式とを前提としつつ、今回の飢饉は倫理的な応報が成り立たないように見えるのは何故かを問題にしている。この問題に対し、内村は先天梅毒からの類比、すなわち「放蕩の結果梅毒に罹る者がありますれば其結果を最も甚しく受くる者は放蕩者彼自身ではなくして彼の生みし子供であります」<sup>81</sup>ということからの類比によって答えようとする。内村は、「最も罪の少い者が最も罪の多い者の罰を担ふて苦しむとは甚だ不公平」<sup>82</sup>のように見えるが、「爾うして私の信じまするに斯くして始めて罪の罪たることが判るのであります」<sup>83</sup>という。

「頑<sup>ぐわんげ</sup>是なき小児が放蕩無頼の父の罪を負ふのを見て姪縦の罪惡の如何に恐るべきかゞ分  
かり、それと同時に之を避くるの心が之を目撃する人の心に起るのであります、それと  
同じやうに明治政府の犯した罪惡に最も關係の少ない東北の民が或は海嘯<sup>つなみ</sup>に罹り、或  
は饑饉に苦んで此政府の如何に思慮なき、如何に無慈悲なる、如何に不公平なる、如何  
に頼むに足らざる政府である事が能く判るのであります、爾うして斯く觀じ来つて我々  
は一層明白に此等罹災民に対する我々の責任が分かるのであります、即ち彼等は重に彼  
等の罪のためではなくして日本全国民、特に薩長の偽善政治家のために苦みつゝあるの  
であるのを見まして、我等は殊更に深い同情を是等の窮民に向つて表さなければならな  
いことが判ります。」<sup>84</sup>

内村は先天梅毒からの類比により、東北の被災者たちの苦しみや嘆き悲しみの矛先を、飢饉の原因である薩長政府や社会のあり方に向けさせようとしている。代贖の発想は全くなく、むしろ、飢饉をもたらした「明治政府の犯した罪惡」を強調し批判する方向へ論を進めている。すなわち薩長の藩閥政府が「如何に思慮なき、如何に無慈悲なる、如何に不公平なる、如何に頼むに足らざる政府」であるかを強調する方向へ論を進めており、さらに全ての日本国民が被災者に対する責任を果たさなければならないと説いているのである。最終的に内村は、もし今回の飢饉の「道德上の意味」すなわち東北の飢饉によって強調的に明らかにされた「明治政府の犯した罪惡」や「我々の責任」が無視され、日本の政府や貴族や国民が今までのままで歩いていくなれば、「私は信じて疑ひません、此次ぎに来りますものは更らに大なる饑饉、之に加へて大なる剣、或は火、或は水、国家を其土台より覆へす者であります」<sup>85</sup>と述べるのである。

以上より、内村は東北の飢饉の問題に関して、粗削りながらも彼なりの社会分析を行い、飢饉の社会的な原因が明治の薩長政府にあることを認識し、これを批判的に見ていたと結論づけられるのである。

## 2-2. 「東北伝道」

先述したように、一九一〇年代から東北は「国内植民地」の役割を負わされるようになり、それに前後して、日本国内での東北の地位低下を憂えて様々な東北論が登場することとなった。その中で最も有名なものの一つが、一九〇六年に出版された半谷清寿<sup>はんがせいじゅ</sup>の『将来之東北』である。半谷清寿（一八五八～一九三二年）は福島生まれの実業家であり、一時期衆議院議員としても活躍した人物である。『将来之東北』は半谷の東北振興策を述べた東北開発論であり、日露戦争後、近代日本が東アジアへ帝国主義的に膨張していく中で東北はどのような方向に進むべきかを論じたものである。半谷は西南の優勢に対する東北の劣勢を意識した上で、北海道の開拓や台湾・朝鮮半島の開発よりも東北の開発を優先し、その経済的な発展を促すべきだとしている。具体的にはシベリア鉄道を利用したロシアとの貿易や中国・韓国との貿易、さらに北米との貿易である。半谷はシベリア鉄道といった世界的な交通網の発達を受け、東北がその地理的な位置と交通網の発達とを利用して貿易のセンターとなることで経済的に発展していく道を述べているのである。この『将来之東北』には、富田鉄之助・後藤新平・新渡戸稲造・池辺三山・島田三郎・原敬・内村鑑三らが寄稿している<sup>86</sup>。内村の文章は「東北伝道」という題名で全集に収録されている<sup>87</sup>。本節ではこの「東北伝道」のテキストを扱うこととする。

内村は当時の東北が置かれていた状況をどのように把握していたのであろうか。それを表すのが以下の引用である。

「東北の救済、是れ目下の日本人に取ては最大問題である、然り、最大問題であるべきである、東北六県は其面積に於ては日本の七分の一である、人口に於ては其九分の一である、爾うして此土地此民が頻年<sup>つなみ</sup>海嘯に、不作に、霜害に、無智に無学に苦みつゝあるのである、如何にして此民を救はんか、是れ日本国の最大問題であるべき筈である、然れども奇なることには東北の救済が最大問題となつて居らない、海外の朝鮮満洲が最大問題となりつゝある今日、東北の救済問題は第三第四の地位に置かれつゝある、是れ甚だ奇異なる現象と言はなければならない。」<sup>88</sup>

内村もまた、近代日本が東アジアへの膨張にばかり目を向けて東北を蔑ろにしていることを認識しており、これを「奇異なる現象」だと批判している。本来ならば国内の「東北の救済」こそ国が優先して解決すべき「最大問題」であるはずなのに、なぜか海外の東アジアへの膨張にばかり集中的に関心を注ぎ、国内の東北の問題は「第三第四の地位」に置かれている。

この「奇なる」事態はなぜ起っているのか。内村が挙げる理由は二つである。一つは「それは東北の生産力が比較的に多くないからである、即ち東北が日本国の物質的強大に貢献し得る部分が比較的に少いからである」<sup>89</sup>ということ、すなわち東北の貧困である。もう一つは、最初の理由の根底にあるもっと大きな問題、すなわち物質主義や経済至上主義という「日本人の不完全なる人生観」<sup>90</sup>である。内村はこの「不完全なる人生観」を批判する。そもそも人間は霊と肉の両方からなる存在者であり、人間を救うなら、霊と肉の両方が救われなくてはならないが、殖産興業や富国強兵を目指す当時の日本においては「今の人は人に霊あることを知ると雖も、霊として人を扱はない、彼等の眼中只肉あるのみである、彼等の思惟の根底は肉である、彼等は肉を離れて何事をも思惟することが出来ない。」<sup>91</sup>という状態にあり、救済事業や宗教ですら衣食や財産といった物質的なものすなわち「肉」的なものに偏るという状況に陥っている<sup>92</sup>。しかし、この「肉」に偏った価値観こそが問題なのである。日本に「肉」的なものを偏重する価値観が蔓延しているからこそ、「其貧困の故を以て東北を輕視<sup>かろ</sup>んずる者」「民の生産力と購買力とに依て其価値を定むる者」<sup>93</sup>が社会の主流となっているのである。内村はこの差別的な価値観を批判し、東北人は霊をもつ人だということそれ自体で他の地方の人と等しく貴い価値をもっていると主張する。

「東北五百万の民は貴い民である、米を作り、蚕を養ふからばかり貴いのではない、人として貴いのである（中略）彼等は靈魂を有たる人である、薩州人、肥後人、長州人と同じ価値のある人である、否な、若し彼等の靈性を發育するならば貴顕<sup>（しんしん）</sup>摺紳も及ばざる人と為ることの出来る者である、若し日本人全体が人の所有品<sup>もちもの</sup>よりも其靈魂を重んずるならば彼等は決して東北五百万の民を今日の憐むべき状態に存<sup>のこ</sup>しては置かない、彼等は有為なる頼もしき兄弟姉妹を有つたるの感を以て彼等を誘掖<sup>ゆうえき</sup>し、開明と幸福と智識とに彼等を導くに相違ない。」<sup>94</sup>

「肉」的なものに偏った発想は、生産力や経済力によって人や地方を差別する発想を生み出す。内村は東北への差別の根幹にある発想を批判し、むしろ「霊」を持ち出すことで人間の平等な価値や尊厳を説いている。未開の後進地とされた東北人も、権力の中樞を担っていた「薩州人、肥後人、長州人」も、「霊」をもっているがゆえに人として平等な価値や尊厳を持っている。この「霊」をもつ人の平等な価値や尊厳に日本人が気づいていないので、上述した「奇異なる現象」が生じるのである。では、内村は東北救済策としてどのような策を提示するのであろうか。

興味深いことは、内村が「然しながら東北は決して其米や、麦や、絹や、其他の農産物や製造物を以て競争場裡に立て勝を制することは出来ないと思ふ」<sup>95</sup>と述べていることである。半谷とは異なり、内村は経済発展に東北の活路を見出さないのである。もちろん、飢饉が起るような状況下では物質的・経済的な発展が必要であることは内村も認めているが、しか

し東北の高緯度地方の気候や地質からいって、経済発展では西南といった他の地方との競争に勝つことはできないと内村は言う。では、東北は何を産出したらよいのか。

「今の日本人が聞たら笑ふであらうが、然し余輩の信ずる所に由れば東北の特産物は意志でなければならぬ、靈魂でなければならぬ、即ち地より得る所が薄いから天より獲る所が厚くなければならぬ、爾うして是れ決して空想ではない、世界何れの国に於ても、我が東北地方の如き地位と境遇とに置かれし国に取ては靈を以て肉に勝つより他に勝を制する途はないのである。」<sup>96</sup>

内村は経済発展ではなく、むしろ「靈を以て肉に勝つ」ことを東北に勧めている。内村が「我が東北地方の如き地位と境遇とに置かれ」て「靈を以て肉に勝」った国として挙げるのは、フィンランドといった北欧諸国、カナダ、アイスランドである。いずれも東北のように物産の乏しい極寒の地の国であるが、「最も円満なる発達」「教育の普及」「宗教の純潔」<sup>97</sup>をもって知られる国だと内村は言う。それらの国が文明国となったのは「虚空より滋養分を吸収するの秘訣」<sup>98</sup>を探り当て「靈を以て肉に勝」ったからであり、内村は「若し土地を耕し得ずんば民の心を耕すべきである、左すれば土地より生ずる産にまさる産を得て国は栄え民は輝くのである。」<sup>99</sup>と言って、東北にも靈的に富む道を勧めている。内村に言わせれば、東北は経済ではなく、精神性や宗教性でもって発展すべきなのである<sup>100</sup>。注目すべきことは、この靈的に富む道なら東北が西南に優ることができるとし、東北救済策として宗教伝道を主張していることである。内村によれば、「人は何人も其靈を磨く必要があるが、然し貧しき民は富める民よりも其必要が多い」<sup>101</sup>のであり、「肉」的なものに恵まれた土地に暮らす九州人よりも、東北人の方がその必要が多いと言う。したがって内村は東北に対する宗教伝道の必要性を主張する。

「余輩は東北の運命は其採用すべき宗教如何に由て定まるとまで断言するを憚らない、東北は真理の浄土となるにあらざれば関西併に西南地方と対立することは出来ない、若し薩州の産は其軍人であり、長州の産は其政治家であり、畿内の産は其美人であり、江州の産は其商人であるとすれば、東北の産は其正直なる、高潔なる、神の人であるべきである、若し東北の山野が其予言者を以て日本の天下を制することが出来ないならば、東北は実に永久西南人の奴隷として存せざるを得ない。」<sup>102</sup>

内村にとって、富国強兵を目指す近代日本において、後進の未開地として「国内植民地」にされつつあった東北は宗教的には「真理の浄土」となることができる土地であり、貧困ゆえに価値がないとして開発を後回しにされた東北の人たちは靈的には「正直なる、高潔なる、神の人」となることができる人たちなのである。「頑にして愚」<sup>103</sup>だが「正直」<sup>104</sup>な東北人

がその靈性を発達させて「靈を以て肉に勝」ち<sup>105</sup>、さらに「正直なる、高潔なる、神の人」となって日本というネーションにコミットして初めて、東北人は西南人に優ることができる。内村が「日本のギレアデ」「テシビ人エリヤを産すべき地」<sup>106</sup>と呼ぶ東北にはこの「靈を以て肉に勝つ」以外に道はない。本テキストの末尾の方で、あたかもマタイ福音書二一章四二節の「<sup>いへつくり</sup>工匠の<sup>すて</sup>棄たる石は家の隅の<sup>いし</sup>首石となれり」（文語訳）の聖句のように、「西南人に賤められ、中国人に愚弄せらるゝ東北人は蓋し「神の智者」として立つであらふ」<sup>107</sup>と内村は言うのである。

以上の「東北伝道」の議論から読み取れるのは、内村が日本という諸地方の連合体の中でキリスト教の伝道に最も適した地方は東北だと考えていたということである。東北の風土や「頑にして愚」で「正直」な東北人こそ、キリスト教を理解し、さらに根付かせることができると内村は考えていた。そして、内村は、日本がまさに富国強兵という「肉」的なものを重視する発想に基づいて東アジアへの帝国主義的膨張を目指す中で、後進の未開地として「国内植民地」にされつつあった東北に対し、東北本来の適性にしがって「肉」よりもむしろ「靈」の立場に立ち、その宗教や精神性でもって日本にコミットすべきだと主張していたのである。半谷の議論とは、日本国内における東北の振興を目指すという点では同じでも、靈や宗教という視点を持ち込むことでかなり内実の異なる議論をしていると言えよう。河西によれば、半谷に限らず、この時期の東北論には共通点として「東北の時代の到来が、国内的には第二維新の待望論から、国際的には世界交通の革命を支えにして、確信されたこと」<sup>108</sup>が挙げられるという。こうした東北論の最中であって、内村は経済発展を求める物質主義的な考えを批判し、靈性や宗教による振興を説いている。内村の議論は、内村自身は明示していないが、見方次第では日本の帝国主義的膨張に乗じて東北の経済発展を図ろうとする論に対する批判だと読むことができるし、さらに敷衍すれば、その批判の射程は近代日本の帝国主義的膨張そのものにまで及ぶのではないかと解釈することもできよう<sup>109</sup>。

内村は一九〇九年に山形と福島とをめぐった際に次のように書いている。

「斯くて秋に入て親たしき東北の山野と旧交を温ため、数多の聖き友に接し、感謝に満ちて夜十一時柏木の巢に還り来つた、人に賤しめらるゝ東北の山野は多くの信仰的勇者を宿して居る、神よ東北と其民とを恵み給へ。」<sup>110</sup>

内村は、薩長政府によって始められた近代日本にあって、帝国主義的膨張を目指す大日本帝国の人たちによって経済的に無価値だとして賤しめられていた「東北」の人々に寄り添い、彼らに神の恵みを祈るような人だったのである。

## 2-3. 「東北救済策」

第二節の最後に、内村の東北救済論がその後、どのような展開を見せたかを簡単に見ておく。中心的に扱うのは、短文のテキストではあるが、一九一三年の「凶作 東北并に北海道の兄弟に代て言ふ」と一九一四年の「東北救済策」との二つである。なぜこの二つを扱うかという、一九一三年、東北と北海道とを冷害による大規模な凶作が襲って大きな痛手を与えており<sup>111</sup>、内村がこの凶作による被害に心を痛めて改めて東北の救済について考えていたことが同年一月に山形県の教友に送った書簡から確認できるからである<sup>112</sup>。上記の二つのテキストはそのような状況下で執筆されたものである。

まずは「凶作 東北并に北海道の兄弟に代て言ふ」である。本テキストにおいて内村は、もし人生の目的が衣食住や繁殖にあるなら、凶作は無意義で無慈悲な大損害であるが、人生の目的が他にあるなら、凶作は必ずしもそうではないと述べ、次のように言う。

「人生の目的は性格を完成するにあり、自己を覚るにあり、無窮の霊と接触して衷に無窮なるにあり、神を識るにあり、靈魂を救はるゝにあり、死して死せざるの或者を獲るにあり、而して此人生最大最終の目的に達せんが為めには凶作却て慶事ならずんばあらず、肉肥えて靈飢え、倉廩充ちて心裏空し、断食時に修養に必要なるが如く、凶作時には覚醒のために益あらん、我が存在の理由を解して我は凶作の故に泣かざるべし、然り、泣くべからざるなり。」

「霊を以て肉に勝つ」というモチーフが今回も反復されているのが確認できる。ただし、「東北伝道」の時とは異なって、「人生最大最終の目的」の観点からみれば凶作に別の意味があるのを知って慰めを得ることができるとされている。「我が存在の理由を解して我は凶作の故に泣かざるべし、然り、泣くべからざるなり」というわけである。冷害による凶作という具体的な危機的状況下にあつて、「霊を以て肉に勝つ」というモチーフのもつ慰めの要素が強調されているのである。本テキストにおいて、内村はハバクク書三章一七節～一九節「その時には<sup>いちじく</sup>無花果の樹は花咲かず<sup>み</sup>葡萄の樹には果ならず<sup>かんらん</sup>橄欖の樹の産は空しくなり<sup>たはた</sup>田圃は<sup>くひもの</sup>食糧を出さず<sup>をり</sup>園には羊絶え小屋には牛なかるべし<sup>き</sup>然りながら我はエホバによりて<sup>すくい</sup>楽しみ 我救拯の神によりて喜ばん 主エホバは我力にして我足を鹿の如くならしめ、我をして我が高き處を歩ましめ給ふ」（文語訳）<sup>113</sup>を引用し、「信者は斯くの如くにして凶年を迎ふ、彼は唯此慰藉と感謝と歡喜とを懷き得ざる者を憐むのみ。」<sup>114</sup>と書いて本テキストを締めくくっている。

次に「東北救済策」である。内村は冒頭で「東北を救ふとは東北人を救ふことである、東北人を救ふとは東北人一人一人を救ふことである、而して人を救ふとは彼を神に導くことである 人を其造主にして父なる神に結附けて其人は完全に救はるゝのである、其時彼は独立の人となるのである、生活問題の彼を悩ますなく、他人の圧迫を被るなきに至るのである」<sup>115</sup>と述べ、東北人一人一人を父なる神に結びつけることでこの世的な「生活問題」や「他人

の圧迫」から「独立の人」とすることこそ、東北の救済であると論じている。「霊を以て肉に勝つ」ことがここではこの世的なものからの「独立」となっており、その「独立」を支えるものが父なる神への信仰なのである。内村は東北を真に救済するものとしてキリスト教による宗教的救済をはっきりと打ち出すのである。

「政府に頼り、政党に頼り、社会に頼りて人は何時までも依頼の人である、東北人各自が神に頼るに至るまでは日本国が総掛りになりて東北を救はんと欲するも、之を救ふことが出来ないのである、東北を根本的に救ふに政党や輿論の力を借るに及ばない、東北に若し幾人かのパウロとルーテルとウエスレーとが起り、而して東北人が是等神の人の言を聴くならば、それで東北は其根柢から救はるゝのである」<sup>116</sup>

ここで対立しているのは「神」と「政府」「政党や輿論」といった社会である。「政府」「政党」「社会」「輿論」に頼っては、東北人はいつまでも他人に依存するだけの存在者にとどまってしまう。東北人を「根本的に」救うには、彼らを「霊を以て肉に勝つ」ことでこの世的なものから「独立」した人にならなければならない。この「根本的に」というのが重要である。内村はさしあたりの救援策ではなく、もっと根本的なレベルで東北の救済を論じようとして宗教的救済を打ち出しているのである<sup>117</sup>。前節で扱った「霊を以て肉に勝つ」というモチーフが、ここで東北の根本的な救済を論じるに際して、はっきりと先鋭的な形で表現されているのである。かくして内村は宗教的救済によって豊かになった国としてスコットランド、オランダ、スウェーデン、デンマークといった国を挙げ、「国の富は其土地に於てあらずして其民の心に於てあるのである、国の救済を単に経済的方面より看るほど浅薄にして愚かなることはない。」<sup>118</sup>と述べ、「東北救済？ 然り至て容易である、聖書一冊あれば足る」<sup>119</sup>と結論づけるのである。

こうして見ると、内村の「東北」をめぐる思考は、一九一四年になっても「霊を以て肉に勝つ」であり、基本的には一九〇六年の「東北伝道」からは変化しなかったと結論づけられる。ただし、「霊を以て肉に勝つ」のモチーフは、その慰めの要素が強調されたり、根本的な解決として先鋭的に表現されたりと、議論の力点に変化が見られるのである<sup>120</sup>。

### 3. 晩年の社会分析の失敗

第一節と第二節では扱わなかったが、内村はしばしば「東北」に対し、批判的な文章も遺している。最後に、内村の「東北」批判の中から、本論のテーマに関係するものとして、晩年の「東北」批判を選び、分析することとする。具体的には、晩年の一九二六年五月二十日の内村の日記である。

「又四月二十五日に九州福岡に於て開かれし九州読者大会の委細の報告が達し、之を読んで涙がこぼるゝ程嬉しかつた。ヤツパリ九州人であると思つた。東北人や北海道人の到底及ぶ所でない。国を思ふの念はヤツパリ九州人の内に最も強くある。維新の際に九州人が日本の天下を取つたには充分の理由がある。日本の精神的革命も亦九州人を以つて始まるのであらう。自分の如き今日まで東北、北海道に矚目したりし者は今に至つて目が醒めた。東北並に北海道の駄目な事が今に至つて判明つた。今より東北より西南に眼を転ずるであらう。北海道に与へんとせし精力を九州に注ぐであらう、そして残る短き生涯に於て今日までの失敗を償ふであらう。思へば無理も無いことである。九州は日本立国の基である。日本の文化は九州より始つたのである。九州は首頭であつて東北は尻尾である。北海道の如きは尻尾の端である。近頃北海道に大失望せる此際、九州より此の善き報知に接して、新たに世界を発見したように思ふて愉快極まりなしである。」

121

今までの議論を全てひっくり返すかのような日記である。内村はさすがに後にこの日記で書いた「東北は尻尾」という発言を撤回しているが、東北を日本の「尻尾」呼ばわりするような日記がなぜ晩年に出て来たのか、本節ではこの問題を論じることとする。結論を先に要約すると、この日記が書かれた原因は晩年の内村の社会分析の失敗であり、そのせいで東北は内村の北海道批判の流れ弾をくらう羽目になったのである。

### 3-1. 「東北」と「北海道」

改めてこの日記の文言を見ると、本文中、「東北」は五回、「北海道」は六回使用されているが、このうち四回は「東北」と「北海道」が明白なセットになっており、「東北」と「北海道」とがほとんど区別されずに同列に置かれていることが読み取れる。第一節でも述べたが、内村は「東北」と「北海道」を区別しないで表象していることがここでも読み取れる。注目すべきことは、日記の末尾で内村が「近頃北海道に大失望せる此際」と述べていることである。ここでは「北海道」が単体で登場している。となると、東北を日本の「尻尾」とする日記が書かれたのは、「北海道」と「東北」とを分けて表象していなかった内村が北海道に対するこの「大失望」を味わったのが原因ではないかと推測できる。実際、内村の伝記的事実を調べると、この頃、北海道に対して失望することがあったことが確認できる。この日記の一五日前の日記にて内村は「小樽新聞より北海道並に札幌に関する感想を徴せられ、忌憚なく之を述べて後に至つて不愉快に感じた。然し心に思ふ事は外に之を言表はすが忠実である。之に由て札幌と絶縁しても惜しくはない。」<sup>122</sup>と書いている。この小樽新聞の記事は五月一四日に「クラーク博士の精神いま何処」というタイトルで掲載された。内容は北海道帝国大学五十年記念行事に対する批判であり、現在は『内村鑑三談話』<sup>123</sup>に収録されてい

るのを読むことができる<sup>124</sup>。この記事の中で内村は自分が若い時に北海道に対して抱いていた理想は全て裏切られたとして、一九二五年当時の北海道をこう批判する。

「北海道は日本を浄化するどころか反つて内地俗化するところとなりました。今や日本中で北海道ほど俗人の跋扈するところはないと思ひます。また札幌が大学の所在地となつた事は事実であります、然し乍ら札幌の地が、果して学生を養成するに最も好き地である乎、今は大なる疑問であります。天然的に最も恵まれたる札幌は今は官僚化され、商人化されて、学生を送るには甚だ悪いところとなりました。（中略）私はクラーク先生の精神は札幌に残つてゐると思ひません。残つてゐるのは先生の名であります。そして今度先生の銅像が出きたとのことであります。併しそれだけであります。先生の自由の精神、キリストの信仰、それは今は札幌にはありません。」<sup>125</sup>

晩年の内村は北海道、特に札幌がある道南地方が内地のように俗化したことを手厳しく批判し、クラーク先生の精神は最早札幌からは失われたと嘆いている。内村は「札幌の今日の精神的情態を見て先生は、天に在りて泣いて居られることと信じます。」<sup>126</sup>とまで述べ、北海道の「内地俗化」を嘆いている。この北海道の「内地俗化」に対する批判は他の晩年のテキストでも確認できる。例えば、内村は一九二八年に札幌に旅行した際、日記に「札幌の大発展に伴ひ、其人間は昔の北海道人に非ず大分に狡く成りし事が判明つた。彼等は内地人同様に人を利用する事に巧みにして人の為に尽す事を知らない。彼も亦純然たる現代人と成りつゝある。日本改造の希望は北海道に在りなどゝは今や到底云ふ事は出来ない。」<sup>127</sup>「北海道に滞在して感ずる事は、土地の発展に驚くべきものと同時に、人の靈性の物質的で低い事である。其点に於て東京は低しと雖も、北海道に比べて遙に優さると思ふ。北海道を以つて日本国の精神的覚醒を行はんと自分等の青年時代の夢はまことに夢として消え失せたと云ひて間違ないと思ふ。」<sup>128</sup>と記している。確かに、内村は当時の北海道に「大失望」していたのである。では、内村の批判する北海道の「内地俗化」とは何であろうか。

ヒントとなるのは「札幌の大発展」「土地の発展に驚くべきものがある」という内村自身の言葉である。河西は、秋田生まれの作家である小林多喜二が小説中で小樽での少年時代を異文化体験として描いていることを紹介しつつ、「一九一〇年代から二〇年代にかけて、都市化と近代化の波は東北を飛び越えて、直接的に北海道に及んだ。」<sup>129</sup>と述べている。内村が上述の二つの日記を書いた時、札幌や函館、小樽といった北海道の道南地方の諸都市は、開拓が始まった頃とはうってかわって近代化が進み、街並みや文化が東京のように都市化していたのである。したがって、晩年の内村はそうした「札幌の大発展」「土地の発展」に驚くと同時に、それを「内地俗化」として忌み嫌った結果、北海道に「大失望」したと考えられるのである。

若い時の理想が全て失敗したという苦い「大失望」のさなかに届いたのが「福岡に於て開かれし九州読者大会」の報告であった。この九州での読者会は、内村が「九州に此声が挙つて私は神に感謝します。神は私をして私の計画以上に成功せしめ給ひました」<sup>130</sup>と書いているように、内村にとって喜ばしい成功であった。以上より、北海道に失望していた時に九州から『聖書之研究』の伝道が成功したという嬉しいニュースが飛び込んできたことが、内村をして、「東北」批判と「西南」再評価の文章を日記に書かせたと考えられる<sup>131</sup>。そして、内村が「東北」と「北海道」とを区別して考えていなかったために、「東北」が「北海道」批判の巻き添えをくらうことになったのである。

さて、問題となるのはこの内村の「東北」批判と「西南」再評価の文章の内容の妥当性である。具体的には、当時、東北と近代化・都市化の進む北海道との関係がどのようなものであったか、また内村がそれを適切に認識できていたかどうかである。当時の東北と北海道の関係については、河西が「東北を飛び越えて」と書いていることがポイントとなる。この頃、東京以東の都市化と近代化は東北を飛び越えて直接北海道に及んでおり、東北はその流れからは取り残されていた。それゆえ、河西いわく、「東北の人々にとって、東京と北海道を結ぶ近代文明のパイプのはるか下に取り残されているという劣化感覚は深かった。」<sup>132</sup>のである。中央と地方との間の格差に加えて、近代化・都市化に成功した地方とそうでない地方との間の格差も新たに生じていたのがこの時代であった。「東北」と「北海道」とを同列に扱うことは最早できなくなっていたのである。にもかかわらず、内村は依然として「東北」と「北海道」を同列に扱っていた。残念ながら、当時の内村の認識は地方間の格差をとらえるところまではまだ達していなかったのである。前節でも扱ったが、内村は素人ながらもジャーナリスティックな社会分析を行い、それをもとに思索するタイプであったが、この地方間の格差の件に関しては内村の社会分析は失敗したと言わざるを得ない。この社会分析の失敗のせいで、「東北」を「北海道」批判の巻き添えにするような文章を内村は書いてしまったのである。

### 3-2. 平民との交流と愛国心

先述したように、内村はその後、東北は日本の「尻尾」だといった発言を撤回することとなる。それはなぜか。最後にこの問題を考察し、「東北」概念や社会分析をめぐる内村の思索の特徴や問題点を明らかにする。

まず、関連する日記を二つほど時系列順にみていこう。一九二六年六月一七日の日記と同年七月三日の日記である。

「六月十七日(木) 晴 「東北を日本の尻尾」と詈りたりとて、東北の友人より小言が来た。之に対して左の一首を以て弁解した。

愛子を尻尾のはしと詈りて

責めねばならぬ親の苦しさ。

東北に誠実がある、然し見識がない。愛国心と世界観念とが非常に欠乏する。」<sup>133</sup>

「七月三日(土) 晴 那須利三郎翁東北巡遊より帰り、山形県鶴岡に於ける諏訪熊太郎君の伝道ぶりに就き委しく伝へて呉れ、涙がこぼるゝ程嬉しかつた。前号に於て為せる「東北は日本の尻尾なり」との暴言は取消さねばならぬ。神は到る所に福音の善き証明者を有し給ふ。人の力ではない、神の能である。聖霊に由り、イエスを主と呼びまつる事が出来て我等に他に何の資格なきも彼の善き証明者と成ることが出来る。人生何が幸福なりとて救主イエスを発見して福音の役者となりしに優さる幸福はない。其意味に於て諏訪君は最も恵まれたる人である。」<sup>134</sup>

これらの引用から二つの特徴を取り出すことができる。まず一つは、平民的な読者との交流である。最初の日記の引用にある「東北の友人」とは斎藤宗次郎の親友にして斎藤とともに内村との交わりを大切にしていた照井真臣乳であろう<sup>135</sup>。照井は岩手県の花巻の小学校の教員を長く勤めた人物であり、宮沢賢治の担任でもあった人物である<sup>136</sup>。二番目の日記の引用に出てくる諏訪熊太郎とは山形生まれのクリスチャンで、内村から洗礼を受けた人物である。諏訪は一九二五年から山形県鶴岡市を中心に農村巡回伝道を開始している<sup>137</sup>。どちらも都市部のインテリというよりも東北地方の「平民」に近い立ち位置にいる内村の読者である。内村は照井からの手紙や諏訪の東北の農村伝道の成功をもって「東北」について考え直し、最終的に「前号に於て為せる「東北は日本の尻尾なり」との暴言は取消さねばならぬ。」と発言を撤回している。このことが意味しているのは、内村は自分が出会った具体的な個人との交流を通して「東北」概念や「東北人」概念の肉付けを行っているということである。これは「東北」や「東北人」に限らない。そもそも事の発端である五月二十日の日記も、九州の読者の声が内村に届いた結果、書かれたものである。内村の「九州人」概念が九州の読者との交流を通して刷新された結果、あのような日記が書かれたのである。ここから、内村の地方やその地方の人々に関する概念は、彼が知り合った具体的な個人や見聞をもとに、単純素朴な帰納法によって肉付けされていたと考えられる。内村は『聖書之研究』を介した「紙上の教会」での交流を通して地方の個別具体的な平民に接し、彼らを介して単純素朴に自分の概念を作っていたのである<sup>138</sup>。学問的な方法というよりはむしろジャーナリスティックな方法である。これをどのように評するかが問題である。一方で、内村の思索は東北や九州といった地方の実在する平民たちに密着した形で展開されていたと見ることができる。内村の使う「東北」や「日本」といった概念は、知識人が頭の中で恣意的に弄ぶような空虚な抽象観念ではなく、地や人にしっかりと根付いていた概念であり、具体的で豊かな内実をもった概念なのである。しかし他方で、このような方法で作られた概念は単なる印象論になりかねないし、当然、厳密な学的検証に耐えられるものではないと見ることもできる。実際、こうしたジャーナリスティックな方法では、下手すれば、新たなステレオタイプや差別を生み出

すことにもつながりかねない。後者の点に関しては、内村の思想の限界であると言わざるを得ないであろう。結局、内村は、いくら社会分析をもとにして思索していくタイプだとは言っても、やはりプロの社会学者ではなかったので、使用する概念にこのような限界が生じると考えるべきである<sup>139</sup>。

もう一つは愛国心の強調である。事の発端となった日記では「国を思ふの念」が九州人の長所とされており、また上述の照井の手紙に言及した日記では「愛国心と世界観念とが非常に欠乏する」のが東北人の欠点だとされている。どちらもネーションを重視する立場からの議論である。そもそも、内村の立場はあくまでナショナリズムの枠内でのリージョナリズムであった。今までの分析においても、内村の地方や「東北」をめぐる思想には日本というネーションへの志向が背後に潜んでおり、「東北」や「東北人」には「日本」というネーションにコミットすることが求められていた。同じ発想がここでも確認できる。「西南」を再評価する日記においても、このナショナリズムの有無が重要な評価の基準として働いており、「九州人」は九州の読者が示したネーション志向ゆえに高く再評価されている<sup>140</sup>。晩年のこの時点でも愛国心をもって何らかの形で日本というネーションにコミットすることが内村にとって重要だった。内村の墓碑銘に書かれた“I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.”になぞらえて表現するなら、内村の立場は晩年に至るまで“Tohoku for Japan”“Kyushu for Japan”だったのである。

このナショナリズムの枠内でのリージョナリズムをどのように評するかがまた問題である。特に、内村の晩年にあたるこの時期は、日本が海外に植民地を獲得して自国の中に他国や他民族を併合していたことから、日本というネーションの形成を志向するリージョナリズムの意義や射程は以前とは変わってこざるを得ない。今後の内村研究では、内村は果たしてその変化に気づいていたのかどうか問われなくてはならないだろう。内村研究ですぐに連想されるのは内村の朝鮮観の問題である。咸錫憲は、韓国併合や韓国の独立の問題について内村に尋ねた際、内村は「イギリスのスコットランドのようになればよいのではないか」と答えたと述べ、この回答に不満を抱いたという<sup>141</sup>。森山浩二はこの発言について内村は「朝鮮民族の独立への願いを理解し、朝鮮民族の《恨》に共感するところまでは至っていない」<sup>142</sup>と評価し、「結果として同化政策推進に間接的に協力したことになったと言えないだろうか。」<sup>143</sup>と批判している。注目すべきことは「スコットランド」の登場である。先述したように、内村は「東北」の救済を論じる際にスコットランドに言及していたが、韓国併合後の朝鮮に対してもスコットランドを引き合いに出している。「スコットランド」という言葉に注目すれば、内村が「東北」という「国内植民地」に関する議論を朝鮮という海外の植民地に敷衍し、ナショナリズムの枠内でのリージョナリズムを韓国併合後の朝鮮に当てはめて考えたと解釈することも作業仮説としては可能であろう<sup>144</sup>。もしその作業仮説が妥当なものと思えられうるなら、それもまた内村の社会分析の失敗を提示するものであり、内村のナショナリズムの枠内でのリージョナリズムという考え方の限界を示すものとして批判的に評さざるを得

ないであろう。なぜなら、「国内植民地」と海外の植民地とでは、日本というネーションの形成を志向することの意味が当然異なってくると予想されるのに、内村はその違いを考えていなかったということになるからである。内村の思想が持つ限界ということになるだろう。もっとも、この仮説が妥当なものか否かを判定するにはさらなる研究が必要である。問題は、「東北」という「国内植民地」に対する内村の思索と韓国という海外の植民地に対する内村の思索とが果たしていかなる関係にあるのかということである。これは今後の内村研究の課題としたい。

#### 4. 結論

本論ではこれまで、内村の思想に潜んでいたところの単一の自明な「日本」概念に対する不協和音を取り出してきた。内村の「日本」概念の内部にはネーション志向のリージョナリズムが組み込まれていたのである。内村にとって、「日本」とは、均一な単一民族の国家ではなく、むしろ独自の個性をもつ複数の地方が集まって形成される連合体であった。その諸地方のうち、内村は近代日本の歩みの中で未開の後進地として「国内植民地」とされていった「東北」の側に立って明治の薩長政府を批判していた。内村は、社会科学の素人ながらも彼なりの社会分析をジャーナリスティックに駆使し、「東北」の側に立って明治の藩閥政府への批判を展開していたのである。さらに、内村は「東北」こそ、日本にキリスト教を根付かせる上で最も有望な土地だと考え、「東北」にキリスト教を伝道することを主張し、さらに伝道の結果、「東北人」が「神の人」となって「日本」にコミットすることを期待していた。この時の内村の「東北」の側に立った近代日本への批判的な眼差しは、近代日本の海外への帝国主義的膨張への批判も射程に入れるほどのものであった。もっとも、内村の議論に問題点がないわけではない。内村の使用する概念が自分の経験からの単純素朴な帰納法によるジャーナリスティックなものであって学的検証に耐えられるものではないことと、彼のリージョナリズムは晩年に至るまでナショナリズムの枠内にあり、日本というネーションのための地方という考え方であったことが、晩年の内村の「東北」批判と社会分析の失敗から読み取れたのである。

以上の内村の思索をどのように評するかについてであるが、本論では、内村の「東北」をめぐる思索を解放の萌芽と位置付けたい。というのは、内村のこの思索においては、社会分析と聖書の思想とが交差しており、内村が近代日本の中で「国内植民地」とされた「東北」に寄り添い、彼らの「救済」を考えていたことが確かに読み取れるからである。もちろん、論や概念装置が粗野で洗練されていないこと、内村の思索が晩年になってもナショナリズムの枠内で行われていること、彼のいう救済がキリスト教による伝統的な宗教的救済であることは賛否両論の出ることが予想される問題点であり、評者の政治的傾向によっても議論が分かれるところであろう。特に、晩年においても日本というネーションのための地方という考えであったことは、当時は日本が「国内植民地」に加えて海外の植民地も支配していた時

期だけに、その意味するところが批判的に検証されなくてはならない<sup>145</sup>。その意味では、内村に見出されるのは解放ではなく、あくまで解放の萌芽なのである。今後問われるべきはこの萌芽がその後どうなったかである。内村の思想の内に潜んでいた解放の萌芽が内村以後の無教会キリスト教の歩みの中でどのように展開していったのか、それとも展開せずに消えてしまったのか、それは現代においてどのような意義をもつのか、それが今後の無教会キリスト教の研究課題である。

---

<sup>1</sup> 古屋安雄・大木英夫著『日本の神学』ヨルダン社、一九八九年、一九五～六頁。

<sup>2</sup> 古屋前掲書、一九五頁を参照。

<sup>3</sup> 古屋前掲書、四〇頁。

<sup>4</sup> 芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性——二つの地平が交わるころにて』三恵社、二〇一六年、一五頁。

<sup>5</sup> 芦名前掲書、一五頁。

<sup>6</sup> 芦名前掲書、二七頁。

<sup>7</sup> 芦名前掲書、二六頁。

<sup>8</sup> 詳しくは芦名前掲書の二六～三二頁を参照。

<sup>9</sup> 内村自身のテキストで言うと、「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみならず全世界を救ふの能力がある、今や基督教は歐洲に於て亡びつゝある、而して物質主義に囚はれたる米国に之を復活するの能力が無い、茲に於てか神は日本国に其最善を献じて彼の聖業を扶くべく要求め給ひつゝある、日本国の歴史に深い世界的意義があつた、神は二千年の長きに渉り世界目下の状態に應ぜんがために日本国に於て武士道を完成し給ひつゝあつたのである、世界は畢竟基督教に由て救はるゝのである、然かも武士道の上に接木されたる基督教に由て救はるゝのである。」（内村鑑三全集二二巻、一六一～一六二頁）が具体例として挙げられる。なお、これ以降、内村鑑三全集からの引用は全て「全集」と表記する。

<sup>10</sup> 三浦永光『現代に生きる内村鑑三 人間と自然の適正な関係を求めて』御茶の水書房、二〇一一年。

<sup>11</sup> 三浦前掲書、五八頁。

<sup>12</sup> 三浦前掲書、五八頁。

<sup>13</sup> 三浦前掲書、五九頁。

<sup>14</sup> 三浦が挙げるのは、宮部金吾、浅見仙作、市川春松、斎藤宗次郎、池田政代、原瀬半二郎と与五郎の兄弟、青木義雄、木村熊二、小山英助、浅井敬吾、井口喜源治、海保竹松、森山慶三、根本益次郎、奥山吉治、木村孝三郎である。三浦前掲書、六〇～六七頁を参照。三浦は「内村の伝道はまず農村の比較的富裕でインテリともいふべき人々の間に反響と支持を得て、次に彼らを媒介としてその地方の農民に語りかけるという順序をとった場合が多い」と述べている。三浦前掲書、六四頁。

<sup>15</sup> 三浦前掲書、六七頁。

<sup>16</sup> 全集二巻、三六六頁。

<sup>17</sup> 全集二巻、四六四頁。

<sup>18</sup> 全集二巻、四六八頁。

<sup>19</sup> 全集二巻、三六六頁。

<sup>20</sup> もっとも、作品であるとはいっても、政治的な読解ができる以上、『地理学考』が政治的な批判を免れ得ないのも事実である。例えば、Howes は一九四二年というタイミングで『地理学考』が『地人論』という題名で岩波から文庫として出版されたことを受け、内村の作品が「後の軍事的な行き過ぎに対して便利な理論的根拠を与えもした」と述べている。John F. Howes “JAPAN’S MODERN PROPHET UCHIMURA KANZOU, 1861-1930” UBC press, 2005, p.121 より引用。役重善洋もまた、内村の『地理学考』を批判する。役重は、『地理学考』を内村が依拠した地理学者アーノルド・ギョー（Arnold Guyot, 1807~84）の“The Earth and Man”と比較し、内村がギョーの欧米中心主義的歴史観の修正や疑似科学的な人種主義理論の排除といった努力をしていることを指摘しつつも、そうした努力は結局のところ不徹底なものに終わってしまっていると批判的に分析している。役重善洋『近代日本の植民地主義とジェンタイル・シオニズム 内村鑑三・矢内原忠雄・中田重治におけるナショナリズムと世界認識』インパクト出版会、二〇一八年、一三四～一三九頁。

<sup>21</sup> 全集二巻、三六八～三七七頁を参照。

<sup>22</sup> 全集二巻、三七二頁。

<sup>23</sup> 全集二巻、三七四頁。

<sup>24</sup> 全集二巻、三七五頁。

<sup>25</sup> 内村鑑三『地人論』岩波文庫、一九四二年、一六一頁。なお、当該箇所は内村鑑三全集中で全集二巻、四六〇頁であるが、ブーエー氏の法則の数字がなぜか逆になっているため、読者の混乱を避けるべく、岩波文庫の『地人論』より引用した。

<sup>26</sup> 全集二巻、四六一頁。

<sup>27</sup> 全集二巻、四一一～四一三頁を参照。

<sup>28</sup> 古代ギリシアのポリス世界と江戸時代の幕藩体制とが類似しているとする内村のこの歴史認識が現代の歴史学の水準からみてどこまで妥当なものであるかは、論者の力量を超えた課題であるため、ここでは扱わない。本論では、内村の人文地理の知識による詩人的構想力の展開が、内村の日本とキリスト教の問題に対する思想にとってどのような意義をもっているかに集中して議論を行うこととする。

<sup>29</sup> 全集二巻、三七四頁。

<sup>30</sup> 全集二巻、四六二～四六三頁。

<sup>31</sup> この「日本」概念の複合性は無教会キリスト教の研究にとって重要な論点となる。すなわち、塚本虎二や矢内原忠雄といった無教会第二世代の「日本的キリスト教」にこの複合性の認識が受け継がれているかどうかという問題である。これに関しては今後の課題としたい。

<sup>32</sup> 「胆汁数滴」のテキストにおいても内村は、「事実の最も明瞭なるは、或は最も明瞭に為し得べきは足尾銅山事件なり、是れ科学者の判断を待て決定し得べきものなり、然るに此明瞭なる事件に対して数年の長き未だ一截断を下す能はず、是を無能政府と称せずして何ぞ（中略）古河若し保護すべくんば何の躊躇か之を要せむ、民の愁声聴くべくんば何ぞ直に受納せざる、聴くを恐れ、聴かざるを恐る、是れ光明を恐るゝ者の措置なり、暗黒を愛する者の行為なり。」（全集四巻、一二六頁。通し番号は十三、小見出しは「無能政府」）とあるように、足尾銅山事件に言及しながら明治の藩閥政府に対し、厳しい批判を浴びせている。

<sup>33</sup> 全集四巻、一二二頁。通し番号は一、小見出しは「社界の病源」

- <sup>34</sup> この時期の内村が薩長政府に対する批判を展開していることは先行研究でもしばしば指摘されている。例えば、政池仁は当時の内村が万朝報において日本語で薩長政府に対する攻撃を展開したことを指摘している。内村のこの傾向は晩年まで続いていた。政池が晩年の弟子にして治療師でもあった藤本重太郎から聞いたところによると、ある日藤本が内村の体をもみながら自分が長州出身であることを告げると、内村はうたた寝から目を覚まし、「薩長のことを聞くと全身の血が怒りに燃える。」と語ったという。政池仁『内村鑑三伝』再増補改訂新版、教文館、一九七七年、二八一～二八二頁。
- <sup>35</sup> 全集四巻、一二二頁。通し番号は二、小見出しは「大に維新歴史を攻究せよ」
- <sup>36</sup> 全集四巻、一二三頁。通し番号は四、小見出しは「起てよ佐幕の士」
- <sup>37</sup> 全集四巻、一二七～一二八頁。通し番号は十六、小見出しは「大虚偽」
- <sup>38</sup> 全集四巻、一三一～一三二頁。通し番号は二十五、小見出しは「此極」
- <sup>39</sup> 全集四巻、一二三頁。通し番号は五、小見出しは「道義的革命」
- <sup>40</sup> 全集四巻、一二四頁。通し番号は七、小見出しは「東北対西南」
- <sup>41</sup> 「第二の維新」という言葉を、実は、内村はほとんど使っていない。DVD版『内村鑑三全集』（東京、内村鑑三全集DVD版出版会、二〇〇九年）を使った調査でも、全集中、用例はたった三件である。少ない用例にもかかわらず、「東北」や「民権」といった言葉と一緒に用いられていることを本論では重要視したい。
- <sup>42</sup> 河西英通『東北——つくられた異境』中公新書、二〇〇一年、一一頁。
- <sup>43</sup> 河西前掲書、四四頁。
- <sup>44</sup> 河西前掲書、四五頁。
- <sup>45</sup> 河西前掲書、四五～四六頁。
- <sup>46</sup> 河西前掲書、八二頁。
- <sup>47</sup> 一つの可能性としては、具体的な東北人の「平民」の読者との交流が挙げられる。具体的な「平民」との交流という論点については、第三節で述べる予定である。
- <sup>48</sup> 全集六巻、二四頁。東京独立雑誌に掲載された「時感」というテキストの中の短文集の一つ。帝国議会の衆議院の解散を受けて書かれたテキストである。
- <sup>49</sup> 全集六巻、四三〇頁。「東北紀行」というテキストの一部。これは仙台へ講演旅行に出た内村の日記的な記録である。
- <sup>50</sup> 全集二巻、三七四頁。
- <sup>51</sup> 河西前掲書、xii.
- <sup>52</sup> 河西前掲書、xii.
- <sup>53</sup> なお、確かに、「奥羽」という言葉も内村は使っている。しかし、DVD版『内村鑑三全集』（東京、内村鑑三全集DVD版出版会、二〇〇九年）を用いた調査ではたった十件しか見つけることができなかった。「東北」と比べると、圧倒的に数が少ないのが確認できる。うち、二件は電車の路線を指示する固有名詞であり、残りの八件も地理上の地域を指示するためにしか使われておらず、本論で扱ってきたような思想的な意味は込められていない。したがって本論では「東北」をもっぱら対象とし、そこに込められている思想的な意味を扱うこととした。
- <sup>54</sup> 全集九巻、三四八頁。
- <sup>55</sup> 全集九巻、三五〇頁。
- <sup>56</sup> 全集九巻、三五五～三五六頁。
- <sup>57</sup> 全集九巻、三五〇頁。
- <sup>58</sup> 河西前掲書、八八頁。

<sup>59</sup> もっとも、一九二六年九月二四日の日記（全集三五巻、九八～九九頁）にて茨城県を東北とみなしているかのような記述があることはどのように解したらよいのであろうか。確かに茨城は東北の福島と接しているので、東北の影響が及んでいると内村が考えていてもおかしくはない。しかし、そうすると、内村が幼少期を過ごした群馬県の高崎藩も、福島と新潟と長野に接しているので、「東北」に含まれることとなる。そこから内村は「東北」育ちだという自己認識をもっていたのではないかという疑問が生じる。実際、後で引用するが、そういう自己認識が伺えるテキストが存在している。この問題については今後の課題としたい。

<sup>60</sup> 全集九巻、三五一頁。

<sup>61</sup> 鈴木範久『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』教文館、一九九四年、一八二～一九〇頁を参照。なお、井口に関しては先述した三浦も詳しく述べている。三浦前掲書、六三頁。

<sup>62</sup> 「東北」についても同様のことが推定できる。詳しくは第三節で扱うこととする。

<sup>63</sup> 全集二巻、四六二～四六三頁。

<sup>64</sup> 全集三四巻、四五三頁。

<sup>65</sup> 内村は高崎藩（現群馬県）に属する武士の家に生まれた。先の注でも述べたが、内村には「東北の産」という自己認識があることが伺える。先述した問題も含め、今後の課題としたい。

<sup>66</sup> 河西前掲書、一九一頁。

<sup>67</sup> 全集一一巻、二五九頁。

<sup>68</sup> 当時の内村には単純な天譴論を展開できない事情があった。内村は前年の一九〇二年八月一八日に『飢饉』というテキストを発表し、「飢饉よ、来れ、来て此罪惡の国民を罰せよ」「飢饉よ、来れ、来て此不公平極まる經濟界を匡正せよ、又天爵を輕んじ人爵をのみ尊ぶ此虚偽の社会を改造せよ、吾等は汝の力を藉るに非ざれば此痼疾の民を根本的に救ふ能はざるべし。」（全集一〇巻、二五五頁）と書いており、これが図らずも的中する形になってしまった。当時の内村はこれに困惑しており、さらに飢饉が自分の本拠地である東北を襲ったことで周囲から批判や攻撃を受けて困っていた。このような状況でできあがった本テキストが単純な天譴論を唱えているとは考えにくいであろう。鈴木範久『内村鑑三日録 1903～1907 平和の道』教文館、一九九五年、三三～三五頁。

<sup>69</sup> 全集一一巻、二六〇頁。

<sup>70</sup> 全集一一巻、二六一頁。

<sup>71</sup> 全集一一巻、二六二頁。

<sup>72</sup> 全集一一巻、二六三頁。

<sup>73</sup> 内村はここでレビ記二五章一～五節「エホバ、シナイ山にてモーセに告げて言給はく イスラエルの子孫につげて之を言ふべし我が汝らに與ふる地に汝ら至らん時はその地にもエホバにむかひて安息を守らしむべし 六年のあひだ汝その田野に種播きまた六年のあひだ汝その菓園の物を剪伐てその果を斂むべし 然ど第七年には地に安息をなさしむべし是エホバにむかひてする安息なり汝その田野に種播くべからずまたその菓園の物を剪伐べからず 汝の穀物の自然生えたる者は獲るべからずまた汝の葡萄樹の修理なしに結べる葡萄は斂むべからず是地の安息の年なればなり」（文語訳）を引用している。全集二六二～二六三頁。

<sup>74</sup> 全集一一巻、二六一頁。

<sup>75</sup> 全集一一巻、二六一頁。

<sup>76</sup> ここで軍備の拡張への言及があるのは興味深い。当時は日露戦争の直前期であり、ロシアとの開戦論が盛り上がりとしていた時期である。この「飢饉の福音」の発表から一か月後、内村は「戦争廃止論」を発表して非戦論の立場を鮮明に表したが、その論拠の一つとして日清戦争によって「日本国民の分担は非常に増加され、其道德は非常に墮落し」たことが挙げられている

(全集一一巻、二九七頁)。「飢饉の福音」の二番目の「道德上の意味」との連関は容易に見てとることができる。内村は、たとえ専門の社会学者としての訓練を受けていなかったにしても、飢饉の原因や戦争のもたらす害毒について彼なりの社会学的な分析を行い、当時の日本の政府や社会が犯しつつあった罪惡をしっかりと見据えていたのである。

<sup>77</sup> アモス書六章三節から六節。ただし、内村の引用ではなぜか「強暴の座を近づけ」「ダビデのごとくに樂器を製り出し」の部分が削除され、さらに「ヨセフ (国民)」と敷衍されている。

<sup>78</sup> 全集一一巻、二六二頁。

<sup>79</sup> むろん、この認識が妥当なものであるかどうかは、別途、歴史学の議論が必要である。本論では、論者の力量を超えるため、この問題は扱わないこととする。

<sup>80</sup> 全集一一巻、二六三～二六四頁。

<sup>81</sup> 全集一一巻、二六四頁。

<sup>82</sup> 全集一一巻、二六四頁。

<sup>83</sup> 全集一一巻、二六四頁。

<sup>84</sup> 全集一一巻、二六四～二六五頁。

<sup>85</sup> 全集一一巻、二六五～二六六頁。

<sup>86</sup> 以上の半谷の『将来之東北』に関する情報は、河西前掲書、一一四～一一七頁および河西英通『「東北」を読む』無明舎出版、二〇一一年、七～八頁を参照した。

<sup>87</sup> 内村は半谷の本の出版よりも先に『聖書之研究』誌上に本テキストを掲載した。そのため、本テキストには「近刊 半谷清寿翁著『東北の将来』へ寄贈せんとて稿せる一篇」と添書きが付けられている。全集一四巻、解題、五一五頁を参照。

<sup>88</sup> 全集一四巻、一九七頁。

<sup>89</sup> 全集一四巻、一九七頁。

<sup>90</sup> 全集一四巻、一九八頁。

<sup>91</sup> 全集一四巻、一九七頁。

<sup>92</sup> 全集一四巻、一九六～一九七頁を参照。

<sup>93</sup> 全集一四巻、一九七頁。

<sup>94</sup> 全集一四巻、一九八頁。

<sup>95</sup> 全集一四巻、一九八頁。

<sup>96</sup> 全集一四巻、一九八頁。

<sup>97</sup> 全集一四巻、一九九頁。なお、ここで挙げた国の中で内村が最も説明に力を入れているのはフィンランドである。

<sup>98</sup> 全集一四巻、一九九頁。

<sup>99</sup> 全集一四巻、一九九頁。

<sup>100</sup> もっとも、内村が後に、信仰や高い精神性が植林や農業を介して国を経済的にも復興・発展させることができるという議論を、『デンマルク国の話』で展開するようになることを思えば、経済発展と靈的に富む道とは必ずしも二者択一ではなく、発展の順序の問題ではないかと考えることもできる。ここで注目すべきことは半谷と内村との差異である。半谷と内村とを比べると、半谷が貿易に着目しているのに対し、内村が農業や製造業のことを考えているという違いをすぐに見てとることができる。内村は流通よりも労働による生産を重視する経済観をもっていた。内村は農本主義的思想を持っていたのである。問題は、この農本主義的思想が流通や貿易を重視する重商主義的思想に対して持った批判的意義である。特に、日本が東アジアに向かって帝国主義的膨張を始めようとしていた時期に、内村が重商主義よりも農本主義をとったことの批判的意義である。これについては三浦の前掲書を参照。

- 101 全集一四巻、一九九頁。
- 102 全集一四巻、二〇〇頁。
- 103 全集一四巻、二〇〇頁。
- 104 全集一四巻、二〇〇頁。
- 105 ここで先述した「入信日記」における信州人の記述を想起されたい。内村が好ましいと考える人間の型が、実は霊的な発達とキリスト教の信仰とに適した人間だと内村が考えていたことが推定できる。そういう人間を内村は「東北人」や信州の「東北的」な「信州人」のうちに見出し、キリスト教伝道の対象としたのである。
- 106 全集一四巻、二〇〇頁。
- 107 全集一四巻、二〇一頁。
- 108 河西英通『東北——つくられた異境』中公新書、二〇〇一年、一一七頁
- 109 もっとも、東北人が「神の人」として「日本の天下を制する」ことを目指す以上は、やはり日本というネーションへの志向があると解すべきであろう。ここでも内村の議論はあくまでナショナリズムの枠の中におけるリージョナリズムなのである。
- 110 全集一六巻、「山形県に入るの記」、五一八頁。
- 111 河西英通『続・東北——異境と原境のあいだ』中公新書、二〇〇七年、二九頁参照。
- 112 一九一三年一月二四日奥山吉治宛書簡にて内村は「東北地方今年も亦凶歉の由、御同情の至りに不堪候、何にか善き農法の発見せられて此災厄を免かるゝに至らんことを切望仕候、信者は肉の災難を霊の幸福に化するの秘術を知り候も不信者は然らず、東北救済の道は目下の急務にして又大なる困難なるを覚え候、旧約哈巴谷書三章十七節以下が貴兄の慰藉たらんことを祈上候、」と述べており、この年の凶作によって改めて東北の救済について考えようとしていたことが伺える。全集三八巻、六九頁。なお、引用中に出てくる「旧約哈巴谷書三章十七節以下」は「凶作 東北并に北海道の兄弟に代て言ふ」にも登場している。
- 113 ただ、内村の引用は文語訳の本文とは若干文言が異なる箇所がある。これに関しては今後の課題としたい。
- 114 全集二〇巻、一八〇頁。
- 115 全集二〇巻、二四二頁。
- 116 全集二〇巻、二四二頁。
- 117 よくよく考えてみれば、さしあたりの救援策を論じることと根本的なレベルでの救済を論じことは、必ずしも二者択一ではない。十分に両立するだろう。文脈が違うからである。実際、内村も一九一四年六月の青山学院大講堂でなされた講演にて「東北の饑饉は四五年に一度宛必ず襲ふが、八丈島が饑饉を馬鈴薯に依て免れた事は、東北地方が日常の食物を改良せねばならぬ事に暗示を与へて居る。」(全集二一巻、四九三頁)と語っており、必ずしもこの世的な方策を否定しているわけではないことが伺える。
- 118 全集二〇巻、二四二頁。
- 119 全集二〇巻、二四二頁。
- 120 冷害凶作の被害の救済に対してキリスト教による宗教的救済を持ち出すのは、いくら議論の文脈が根本的なものであったとしても、その是非をめぐって賛否両論に分かれるであろう。ここで東北の状況を顧みると、河西は一九一三年の冷害凶作の前後から、東北救済事業の実施に伴い、東北をみる眼差しに変化が生じたと述べている。「救済事業が実施されるプロセスは、東北が『救済されるべき地域』として社会的に認知されていったプロセスでもあった。」(河西前掲書、三五頁)というわけである。その後、一九三〇年代に入ると、東北は大災害に連続して襲われ、その度に救済の対象となった。河西は一九三五年の相馬郡のある村長の言葉を引きつつ、「凶作

下の東北民衆が苦しんだのは、たんなる経済的困窮だけではない。みずからを見つめる社会的『同情』の眼差しにも苦しんだのである。」(河西前掲書、八七頁)と述べている。このような状況下において、「政府」「政党」「社会」「輿論」に頼っては東北人はいつまでも他人に依存するだけだとして、キリスト教信仰による「独立」を説いた内村の議論はどのような意味をもったであろうか。今後の課題としたい。

<sup>121</sup> 全集三五卷、五四頁。

<sup>122</sup> 全集三五卷、四八～四九頁。一九二六年五月五日の日記である。

<sup>123</sup> 鈴木範久編『内村鑑三談話』岩波書店、一九八四年、三一六～三一八頁に収録されている。

<sup>124</sup> 鈴木範久『内村鑑三日録 12 万物の復興 1925～1930』、教文館、一九九九年、一〇一頁。

<sup>125</sup> 鈴木範久編『内村鑑三談話』岩波書店、一九八四年、三一六～三一七頁。

<sup>126</sup> 鈴木範久編『内村鑑三談話』岩波書店、一九八四年、三一七頁。

<sup>127</sup> 全集三五卷、三五一頁。一九二八年八月一三日の日記である。

<sup>128</sup> 全集三五卷、三五五頁。一九二八年八月二三日の日記である。

<sup>129</sup> 河西前掲書、六一頁。

<sup>130</sup> 全集二九卷、五二二頁。

<sup>131</sup> 加えて、この頃、関西・四国・九州にて『聖書之研究』の読者が急に増えたことも原因の一つに数えることができるだろう。全集三五卷、六一頁も一九二六年六月一日の日記を参照。

<sup>132</sup> 河西前掲書、二一三頁。

<sup>133</sup> 全集三五卷、六三頁。

<sup>134</sup> 全集三五卷、六九頁。

<sup>135</sup> 全集三九卷、二五六～二五七頁の照井宛の書簡を参照。なお、日記と手紙とで日付に違いがあるが、これはおそらく内村の記憶違いであろう。斎藤宗次郎に関しては、先述した三浦もまた「平民」の例として言及している。三浦前掲書、六二～六三頁。

<sup>136</sup> 無教会史研究会編著『無教会史 第二期 継承の時代』新教出版社、一九九三年、三六七頁と梶山義次・富永國比古共著『『銀河鉄道の夜』と聖書 ほんたうのさいはひ、十字架への道』キリスト新聞社、二〇一五年、三～四頁とを参照。

<sup>137</sup> 無教会史研究会編著『無教会史Ⅱ 第二期 継承の時代』新教出版社、一九九三年、一六六～一七四頁を参照。

<sup>138</sup> 赤江達也は無教会キリスト教の共同性として、集会を中心とする師弟関係のつながりと雑誌の読書を通して形成されるつながりとの二つを指摘し、後者を「紙上の教会」と呼んで分析している。赤江達也『「紙上の教会」と日本近代 無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、二〇一三年を参照。本節の議論は、『聖書之研究』という紙上の教会上で行われた内村と地方の読者とのやりとりが内村の思索に影響を与えた事例といっていよう。

<sup>139</sup> 次に問題となるのは、内村のキリスト教信仰を継承した無教会第二世代はこの限界をどのように乗り越えたのか、それとも問題設定自体が消滅してしまったのかということである。今後の課題としたい。

<sup>140</sup> この九州読者大会に参加した人たちの感想は、七名のものが『聖書之研究』の三一一号、三一三号、三一四号の三つに掲載されており、現在は『聖書之研究』復刻版二九卷に収録されているものを読むことができる。七名のうちに明白な「国を思ふの念」が確認できるのは原田美実と熊井佐兵衛と藤本正高の三人であり、明白な「国」ではないが「世」や「社会」に言及しているのが近藤松枝と佐伯貝二の二人である。聖書之研究復刻版刊行会『内村鑑三主筆 聖書之研究復刻版』第二九卷、二七一～二七二頁、三六四～三六八頁、四〇七～四一〇頁を参照。この七名のうち、藤本正高は病院や刑務所を中心に独立伝道を行った内村の信仰の継承者として『無教会

史』で論じられている。無教会史研究会編著『無教会史Ⅱ 第二期 継承の時代』新教出版社、一九九三年、一五六～一六六頁および同『無教会史Ⅲ 第三期 結集の時代』新教出版社、一九九五年、一〇四～一一〇頁を参照。

<sup>141</sup> 咸錫憲「私の知っている内村鑑三先生」『内村鑑三全集』月報三九、四頁。

<sup>142</sup> 森山浩二「内村鑑三と朝鮮」内村鑑三研究第二十九号、キリスト教図書出版社、一九九二年、一六頁。

<sup>143</sup> 森山前掲論文、一六頁。

<sup>144</sup> 河西によれば、近代日本において東北はしばしばスコットランドと比較されており、スコットランドも東北もともに国民国家の中で劣位に置かれているという認識が共通してみられると言う。国民国家内での劣位を論じる際に東北とスコットランドとを比較する東北＝スコットランド論が近代日本ではしばしば行われていた。これを念頭におくと、内村の韓国併合後の朝鮮に対するコメントは、なまじスコットランドに言及しているため、さらに慎重な扱いを要するものとなる。もっとも河西は、内村の「東北救済策」におけるスコットランドへの言及はそれほど明白な東北＝スコットランド論ではないという。河西前掲書、二三頁を参照。実際、「東北救済策」のテキスト中では、スコットランドは「東北」と気候や地質が似ている国の一つとして、オランダ・スウェーデン・デンマークとともに挙げられているに過ぎず、国民国家内での劣位を論じる明白な東北＝スコットランド論を読み取るのは少し無理がある。この問題に関しては内村のスコットランド観を改めて調べる必要があるが、本論では今後の課題としたい。

<sup>145</sup> 無教会の政治思想においてネーションが大きな位置を占めていることを示しているのが柳父圀近の研究であり、その成果は柳父圀近『日本のプロテスタンティズムの政治思想 無教会における国家と宗教』で見ることができる。柳父のこの本は内村鑑三の政治思想と彼の弟子である三人の社会学者、南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄の政治思想とを、キリスト教信仰との関係という観点から分析したものであり、具体的には、無教会の政治思想ということで、彼らのネーションをめぐる思索が中心的に取り上げられている。柳父の立場は無教会の政治思想の遺産から肯定的なものを取り出してこようという立場であり、例えば大塚が発展途上国の経済の問題をネーション形成や民主主義の経済的基礎の問題と捉えたことについて柳父が「この問題に関する先生の理論的洞察は、その後の歴史の推移（『冷戦』終結以後の、すべてを呑み尽くす市場経済のグローバル化の進展）にもかかわらず、今日でも、むしろ今日こそ、『繁栄』と、その足元での『二重の貧しさ』との両極化の問題を見すえる、大変アクチュアルな問題を提起しているのではないのでしょうか。」（柳父前掲書、三六八頁）と述べていることから、それは伺える。柳父は現代においてもネーションは重要な意義をもつと考えているので、大塚の議論から肯定的なものを取り出しているのである。ここから汲み取れるのは、無教会の政治思想を評価するに当たってはネーションに関する予備論的考察と評価が必要だということである。評者がネーションの本質や実態をどのように理解し、今後のネーションの運命をどのように予測しているか、その理解や予測がどれほど妥当なものなのかによって、内村や無教会の政治思想の評価も定まってくるということである。このネーションに関する予備論の必要性については、今後の課題としたい。

（わたなべ・かずたか NCC 宗教研究所研究員）